

七月十五日

大里組

石神組

(四九七)

以書付致啓上候、殿様、来ル八月中旬頃、北浜筋ニ為成候ニ付而者、御休泊割、其許様へ及御相談、追而申出候様御奉行衆より御達御座候、依而者其御扱下御休泊割致承知候上、右へ引続、此方別高地内御休泊割致可申出候間、御扱下御割合被仰聞候様いたし度、依而此段得御意候、以上

七月十五日

島村孫衛門

加藤孫三郎様

追啓、残暑之節、弥御堅勝被成御勤仕奉珍重(候右)□□之儀ニ付而者、尚近々及被御相談候義も可有之候、先□義者何分被仰下候様いたし度奉願候、以上

(四九八)

一翰致啓達候、秋暑之砌愈御堅固可被成御勤役珍重候御事御座候、然者支配所高原村兵三郎与申者当二月中大中村より帰り候於途中、年齢四拾近キ旅人、三拾位之女・三才計之小児ヲ連休居候所、右女病氣にて及難儀候間、馬ニ為乗呉候様任無心候所、夜ニ入、宿貸之者無之ニ付、無抛右三人共留候由、然ル所男者翌朝逃去行衛不知、女者病氣次第重、薬用等相加候へ共終ニ相果、生所更ニ不相分旨訴出候間、吟味為致候所、全ク病死ニ無相違候故、死骸者仮埋申付、御領中触流候得共、手掛り一切無之、相残候小児者右兵三郎養育仕度段願有之、預置候所、右病死人ハ土浦領和泉村修験仙寿院与申者娘ニ而、御領所小泉村百姓直吉与申者へ縁付、子供三人致出生候へ共、末女ヲ召連致出奔候由ニ而、此度右修験妻彼地迄尋求、小児見届候所、相違無之趣ニ而引取申度段、右村役人へ願出候旨訴出候へ共、一体人元ニ茂無之、殊婦人申候而已ニ而ハ難相渡候間、直吉村方御糺之上相違無之候ハ、早速

為迎由緒并村役人罷越、始終之次第ヲも承届小児引取候様御達可被成、此段為御懸合如斯御座候、以上

七月

島崎八郎左衛門様

加藤孫三郎

(四九九)

覚

文金壹兩壹分小粒

此山七畝拾歩

右、油繩子村稗御藏壹棟当巳年中新規相建候付、土地所相場ヲ以御買上代被下置候付、請取手形仕出候条、御裏判相濟候様致度奉存候、尤此段吟味方へも御断可被下候、以上

七月

加藤孫三郎

(五〇〇)

扱下高貫村太衛門と申もの、去月廿七日銀杏坂ニ而鑿拾ヒ候由、弥無相違儀ニ候哉相札申出候様御達ニ付、村方為相札候処、此者平生気村（現）之様ニ而罷在候処、去月廿四日宿元罷出、今以不罷帰候ニ付、所々相尋候得共、行衛不相知段申出候間、尚亦尋申付置候事ニ御座候、仍而此段申出候、以上

七月十九日

加藤孫三郎

御目付様中

(五〇一)

覚

小飛脚御中間式人

右、宍戸領役人中へ懸ヶ合之儀有之、伺之書状指遣候間、御中間頭へ御断可被下候、尤日限之義私より申合候様可致候、仍而此段申出候、以上

七月

加藤孫三郎

(五〇二)

宍戸領役人中へ懸ヶ合之儀有之、書状宍戸御陣屋迄指遣候付、小飛脚御中間御断御用人衆へ申出候間、定メ而相廻候半、仍而ハ来ル十九日田見小路役所へ立寄、書状請取候様御申付御座候様致度存候、以上

七月十五日

加藤孫三郎

高島武兵衛様

(五〇三)

覚

鑑四百文

右、額田村へ指置候御鳥船致破損、御用ニ不相立候付、伺之上入札ヲ以払代、此度御役金方ニ相納候而、請取候様御役金方へ御断可被下候、以上

七月

加藤孫三郎

(五〇四)

七月十五日仕出御用

- 一、内田村之者被盜品、前留之通御奉行衆へ申出候事并廻状仕出候事
- 一、油繩子村稗御藏土地代請取手形并御用人衆へ之御断、前留之通申出候事

- 一、宍戸領小飛脚之儀二付、前留之通御用人衆へ御断申出候事
- 一、高貫村太衛門宿所二不罷在候付不相分候段、前留之通御目付方へ申出候事
- 一、額田村へ指置候御鳥船払代納之儀、御役金方へ之御断、前留之通御用人衆へ申出候事
- 一、御鹿狩之儀二付、別留之通御奉行衆へ申出候事

同日帰り御用

- 一、大沼村百姓庄藏飢人扶持願之通相済候段、御奉行衆より御達候事
- 一、龍光院御鐘懸<sup>\*</sup>等出来候代鏝被下申出候通相済候段、御達候事

(五〇四)

\*鐘懸 槍をかけておく白。

(五〇五)

御書付<sup>(致カ)</sup>拝見候、高原村兵三郎へ預置候小児引渡之儀二付、委細被仰聞候趣致承知候、右ハ御申出両様之内、其許様より御懸ケ合被成候方可然旨御達御座候間、右御心得□宜敷御取扱可被成候、此段可得御意御□□御座候、以上

七月十三日

山口直次郎

松平権藏

加藤孫三郎様

(五〇六)

加藤孫三郎へ

鏝壹貫九百七拾九文

右ハ、去月四日 殿様村松へ被御成候節、龍光院 御膳所<sup>\*</sup>二相成候付、御鐘懸ケ等出来候代鏝被下申出之通相済候事

(五〇六)

\*御膳所 ごぜんしょ。食事をととのえる所。食物を調理する所。厨。

(五〇七)

覚

一、式人御扶持

役所見習

佐川与三郎

右役所支配手代廻り合兼候付、伺之上当月中御雇相済居候所、未夕小割付指銭等之役物諸御普請穿鑿等之御用も数多相<sup>残カ</sup>居、殊二者来月中北浜筋 御成被遊「」候得者、此節より諸御用取込、剩内役手代忝人病氣ニ而、先達而より相引罷在候へ共、大病故出勤致兼、其上御城米納懸リニ、去年中より御藏地へ指出置候支配手代忝人、未勘定相済不申候付、水戸表へ指置、其外病人等も有之付、如何様ニも相廻兼指支申候間、何卒右之者来月中御雇続御済被下候様仕度此段奉伺候、以上

七月

加藤孫三郎

(五〇八一)

死骸改書

水死男忝人

年四十位

但、惣身無疵、尤肉脱

一、髮眉毛共ニなし

一、眼玉なし

一、鼻低方

一、齒並体

一、舌短ク少し砂<sup>ハム</sup>

一、耳常体

一、面体肉脱不分

一、尻門<sup>鱧</sup>通シ候様子

一、手足爪之間ニ砂入 但、片足わらんし着

一、せい少シ高キ方

着類

一、花色千草之しやふし格子縞古単物

(五〇八一)

\*鱧 かわへび。うなぎ。

一、花色無地裏淺黄太ひも之服懸（履か）ケ

一、花色木綿小く（倉）ら帯

一、白絹下帯

右死骸、当村森戸内川筋乱杭ニ懸リ居候ニ付御訴申上、我々共御案内仕無相違御改申受候、已上

文化六年

巳七月十四日

額田村

御山横め

左内

庄屋

市十郎

〃 藤兵衛

与頭

庄兵衛

〃 太次兵衛

石神御郡方

改人

井坂新三郎

(五〇八一二)

扱下額田村川中乱杭ニ死人掛リ居候段訴出候付、支配指出為相糺候所、委細死骸改書之通溺死致候様相見候得共、日数ヲ経候様子故、疵ニ而も可□□□□睨ト相分不申候、且見付人等も相糺候へ共指而疑心之筋相聞不申候間、川上より流来候義ニも可有之哉之趣、土中へ仮埋申付、同役へも申合、一統触流候様可仕奉存候、仍而此段申上候、以上

七月

加藤孫三郎

右廻状ヲも指出候事

(五〇九)

七月廿日仕出御用

- 一、額田村水死人之儀、前留之通御奉行衆へ指出候事
- 一、右同断廻状ニも仕出候事
- 一、村松東方村出火之義、別留之通御奉行衆・御用人衆・御目付方へ為知指出候事
- 一、本多越中守殿下りニ付、給物為知別留之通り御用人衆へ指出候事
- 一、善十・庄衛門拝借請取手形仕出候事
- 一、村松村龍光院御普請御入目請取手形并諸証摺吟味方へ指出候事
- 一、郷中ニ而読書并手跡指南致候者申出、別留之通忠次郎所へ書面添遣候事
- 一、与三郎御雇続伺之儀、前留之通見習中迄□□添遣候事
- 一、安藤市左衛門弁納去辰年ハ半納ニ有之哉、御役金方へ問合遣候事

(五一〇)

一、

日帳方定付

黒楸御中間

善衛門

右之者、浜方廿分一役申付、御留主居同心列被遊、御切符金五両式人扶持被下置、川尻村へ罷越、心ヲ付相勤候様可被申付事

但、御切符者分一金之内より被下、加藤孫三郎可為支配候事

(五一一)

御目附方より呼出ニ付致仕候処、俊祥院様御忌日之儀ニ付、別紙写之通達御座候間、御支配々々も宜御達可被成候、御覽御順達可被成候、以上

(五〇九)

\*本多越中守 本多忠誠(ただし  
げ)。陸奥泉藩二万石三代藩主。備  
荒制のため蓄穀の本倉を創設し、凶  
作時に農民を救う。天保三年、七二  
歳で死去。

七月十日

九郡宛

外習見衆(見習)式人

小原忠次郎

俊祥院様御忌日十月廿日之処、尊慮被為在 公辺へも被仰達以来、十月十七日之御日取二相直候事、  
右七月十日御目付鶴殿平七より達候

(五二二)

以廻状得御意候、打続雨ふり不申村々難儀之趣相聞申候間、静・吉田両社にて五穀成就之御祈祷之義、  
我々兩名二而一昨日申出候間、此段得御意候、以上

六月十六日

八郡宛

藤田次郎左衛門  
小原忠次郎

尚々、へいさらばさら之玉拝借申出洗申□御座候、以上

(五二三)

以廻状得御意候、母義病氣之処、養生不相叶今晝相果申候間、此段為御知申候、且忌定式之通相引申  
候二付、跡御用之義ハ権蔵殿・直次郎殿へ御無心申候事二御座候、此段得御意候条乍御世話御順達可  
被下候、以上

七月三日

八郡宛

入江忠八郎  
小宮山次郎衛門

(五二二)

\*へいさらばさら之玉 ポルトガル語の *Pedra* (石の意) と *bezor* (結石の意) を重ねた語。馬または牛、羊などの腹中から出る石。解毒剤として用いた。また病気を治す呪いに唱える言葉としてもいう。ここでは雨乞い祈願のための道具として用いられた。



(五一四一一)

諸同心以下忌服之義、別紙之通御達御座候、御覽御順達可被成候、以上

六月十五日

藤田次郎左衛門

(五一四一二)

諸同心已下忌服之儀、別紙之通り御心得可有之候、以上

六月十五日

赤林八郎左衛門

興津所左衛門

野中三五郎

藤田次郎左衛門様

一、 同心已下組支配有之

面々

諸同心已下輕者とも父母忌十日服定式之通、其外之親類從弟迄ハ忌三日服半減可請事

但、父母者日数通承り候共、聞付ル日より忌十日可為請、其外之親類ハ忌明後告来候ハ、一日

遠慮之事

右之通、先年より之御定ニ有之候処、近頃逼々ニ為請候面々も有之趣相聞候付、尚更相達候条其旨可  
相心得事

(五一五)

以廻状致啓上候、倅正吉儀久々病氣之処不相叶養生、昨八日相果申候、仍<sup>④</sup>拙者儀定式致忌引付、跡  
御用之儀ハ権藏殿・直次郎殿御申合御勤被下候様致度旨、猶又右之段筋へも被仰出被下候様御頼申候  
事ニ御座候、右之段為御知得御意度如斯御座候、御覽乍御世話御順達可被下候、以上

六月九日

増子幸八郎

九郡宛

外見習衆式人

(五一六)

以書付致啓上候、然者上川合等舟渡之内壹艘ツ、ハ 上より御普請被下、ぬかた(瀬田)・川合隔番ニ造替御勘定所へ仕出候付、御入用相請取候義ニ御座候処、右外ニ壹艘ツ、舟渡共持前ニ而造替候分、舟板材木之義ハ丸木ニ而御立山より相渡、元山作料之義も舟渡共より為相渡来申候、尤此度者舟板材□為木取相渡申候処、右等之分御□□御取扱ハ如何ニ御座候哉、やハリ御役所ニ□□材木ニ為御取扱ニ而御渡被成、元山共ニも工数証文御渡被成候御扱ニ御座候哉、又ハ丸木ニ而御渡之上元山作料等ハ御構無御座候哉、御取扱ふり御問合申度如此ニ御座候、指急候義ニ御座候間、御取込中乍御六敷、早速御報被仰聞候様致度旁及御掛合候、以上

七月廿二日

大里組

内役共

石神組

御内役様中

(五一七)

以廻状得御意候、然者当春より唯今まで用水御普請ニ而本山御召仕被成候工数証文、当月中不殘当人共へ御渡被成候様被仰合可被下候、尤右之義ハ先達而(より)度々御掛ケ合申候得共、其時々御渡不(被成)□□暮ニ至り勘定相極候後、直ニ我々とも江御廻被成候御役所も御座候処、仕手頭料方より相廻不申候得ハ、誰組と申義不相分指支申候間、已采共其時々当人共へ御渡被成候様、旁宜敷被仰合可被下候、且此後御召仕被成候義も御座候ハ、直ニ当人共へ御渡被下候様致度奉存候、暮ニ相成忝度ニ御廻被成候而

八、組立候も混雜仕候付、手透之間組立置候間、右之振二而何分宜被仰合可被下候、右之段得貴意度如此二御座候、以上

七月廿日

歩付組

手代共

大里組 小菅組

石神組

御手代様中

(五一八)

上高場村黒鍛藤次衛門相引居延引□致候間、代人為指登候様御申付に御座□、右之者義者当春田彦村二而打擲被致候付、其砌村方よりも申出、尚又武田伴衛門より得御意候所、今以何等之御挨拶も無之候へ共、今程当人致快氣候間、当人指遣候而も可然哉、御懸合旁得御意候、以上

七月廿五日

加藤孫三郎

鈴木專衛門様

(五一九)

扱下油繩子村稗御藏相建候処、右御入用之内釘之義者御普請方より請取、追而代鏝右役所へ相払候様御達之処、此度御普請取初立候付、右釘入用次第相渡候様、御普請方へ御断可被下候、以上

七月

加藤孫三郎

(五二〇)

乍恐以書附御訴奉申上候事

一、当村小人八百十所持仕候衣服拾四品并豊三郎分五品、当五月廿六日昼之内紛失仕候二付、前書品

数銘々書付二仕、御苦難願上置候処、是迄も村内之者へ八百十を始疑心等仕候者も有之、近々村役元迄願出候義も及数度有之候処、何れ二も御役所様御苦難申上候者、更二手筋等も無之、愚前之八百十等無証扱之疑心仕候ゆへ事発り候処、村役人之我々御訴申上候も恐入候故、是迄手筋尽シ承り居候得とも何二而も拘リケ間敷義不相見候故、村役人取扱を以是まで延置候所、前書二申上候雜物新里坪二而佐川生之者<sup>(姓カ)</sup>仕業二も可有之哉之よし、右由緒喜左衛門与申もの内田村におゐて造酒売買仕候□□二而竊二承申候者、太田村東之上古着屋<sup>\*</sup>伝十与申もの、新里坪より買取申候風聞一昨十七日夕承り申候二付、其夜中早々□□<sup>(ニカ)</sup>罷帰リ喜左衛門由緒共一同吉郎次宅へ寄合□□<sup>(致カ)</sup>、喜左衛門より由緒一同へ申談候者、当五月中前書兩人紛失之品、我々仲<sup>(中)</sup>廣<sup>(廣)</sup>之ものより太田村古着屋へ売渡候沙汰承り候二付、早速夜中より騒立候事二御座候間、何二も由緒<sup>(中)</sup>仲二而友吟味可仕候様、一統へ相掛候得とも、右由緒中より申出候者、是まで且而心当も無之義二候得共、指当り申候事故、第一太田古着屋へ掛合、弥右名前等迄も承届、其上二而御苦難相願候様に仕度よし申二付、右寄合居候内より了衛門、吉郎次兩人太田村へ指遣候相尋、早速二可罷帰候様申遣候、寄合居候由緒一同朝飯二家々へ相引、食事後直二寄合居候所、右之内豊三郎朝飯後不罷出候故、迎二兩人遣候所、宿元二而女房申様二者、今早朝由緒相談有之□□二而罷出候而已、食事等二も宿へ者参り不□□申聞候間、由緒之内所々相尋候得共行方□□不相知候故、一統安心不仕候二付、豊三郎尋之□□七人程支度仕太田より帰候者待居候処、罷帰候へハ、弥豊三郎二相違無之ニ付、久慈川船渡処々相尋、西者門部・瓜連<sup>(寄書脱カ)</sup>辺、南柳・枝川・湊辺迄委ク行方承り候得共更二不相知、今四ツ時罷帰申候、尚又太田古着屋<sup>(上脱カ)</sup>等右之品<sup>(買カ)</sup>売取候得共、何二哉安心も無之ニ付、売人豊三郎方へ早速品相返候、則請取書付等伝十所持仕候面、使之者兩人見届罷帰申候二付、右雜物豊三郎宅二可有之哉と了簡仕、支配与頭立合を以由緒之もの共、豊三郎家内中尚又炭屋<sup>\*</sup>等迄吟味仕候得共、更二不相見候故、無扱品不相見候ゆへ、前書仕抹等逸々願出候付、村役人より由緒へ申渡候者、如何様二も品見付度候者、随分心用当人行方共相尋可申旨申渡「<sup>(尾カ)</sup>」<sup>(尾カ)</sup>、昨夕御内意二罷出候後、由緒共寄合申談「<sup>(尾カ)</sup>」<sup>(尾カ)</sup>品紛失如何様二も見出度随分相改候□□<sup>(尾カ)</sup>、炭屋之角二古俵六七表も有之場所見付相成候間、右之場処又々一同罷越、

(五二〇)

\*古着屋 着古した衣服を扱う商人。当時の古着は、洗張りや仕立て直しをくり返して使えたので、特に庶民に大きな需要があった。

\*炭屋 すみや。木炭を貯蔵しておく部屋、もしくは小屋。

与頭立合を以昨夜中四ツ過ニも可有之哉相改候処、甚々之切俵より前書之品々十一見付出候由、夜半頃持参申出ニ御座候得共、弥豊三郎ニ相違無之間、前書如何様御訴奉申上候、誠由緒共大勢故風聞之所、承届尋当申出ニ御座候間、此上御仁恵を以御下知被成下置候様奉願上候、仍而如件

文化六年巳七月十九日

本米崎村

庄屋

善左衛門 印

与頭 四人 印

御郡御奉行所様

(五二一一)

本米崎村

新里坪

百姓

豊三郎

とし「」

容体書

一、せいひくき方

一、薄瘡顔丸方

一、眉毛常体

一、髪薄キ方

一、人形都而常体

着類

一、呵以嶋单物

一、花色こくら帯

一、脇指長式尺位

銀小尻

是ハ、相用候哉、若相用不申候哉、宿元ニ不相見候ゆへ持参ニ可有之様了簡仕候

(五二一一)

\*呵以嶋 藍縞(あいじま)のこと。  
藍色の縞模様、またはその織物。

一、股引脚半 花いろ

是ハ右同断

一、手指 常ニ所持仕候所、宿元ニ不相見候故

是右同断

右、当村新里坪豊三郎行方不相知候ニ付、前書様体書委ク書上候様被仰付候間、無相違相改申上候、以上

巳七月廿一日

右村

庄屋

善左衛門 印

(五二一一二)

扱下本米崎村百姓八百十豊三郎と申もの□□之品、当五月廿六日被盗取候旨訴出候ニ付、委細「  
」申上置、於役所ニも屹与吟味為仕候得共、手懸無御座候処、去ル十七日同村喜左衛門と申者内田村へ罷越候へハ、太田村伝十と申者右ニ似寄候品買取候趣承り、同夕豊三郎等招呼相談之上、翌日伝十方相尋候へハ、売主ハ却而豊三郎ニ有之候得共、疑敷故直ニ相返申、仍而豊三郎方へ由緒村内之者為吟味罷越候処、右之もの儀ハ最初相談之席より出奔仕、尤八百十被盜共取カ分十一品、豊三郎灰屋之内より見出候旨申出候ニ付、早速召捕之者申付所々為相尋候得共、いつれへ逃去り候哉行衛不相知候間、同役共へも申合相糺申候得共、尚御町方へも御達可被下候、扱亦見出候品ハ当人へ相返候様仕度奉存候間、早速御下知可被下候、仍而別紙様体書指添此段かた／＼申上候、以上

右、被盜品当人へ相返候様御達候事

七月

加藤孫三郎

右一件ニ付、同役共へ之廻状、本文之趣ヲ以仕出候事

(五三二一一)

以書付致啓達候、沢村一乘院御年具未進<sup>(才)</sup>□<sup>(代)</sup>悴主計牢扶持代都合金高五両余由緒之□<sup>(金共カ)</sup>弁納一件、委細御承知之義ニ候処、右牢扶持□<sup>(代)</sup>内金三分鏗壹貫文余ハ先達而御取立、右村役人共より当役所へ相納候処、殘金貳分飯田善藏院不納候由ニ付、則右院へ相達候へハ、前頭割符相極候節、右院弁納分ハ全ク貳分四百七拾文余之よしニ而沢村役人より書付申受、其内当納式朱直様相濟、殘金之分ハ来午より年賦納ニ相成候趣ニ有之付、右之上ニも亦々式分相納ニ而者甚指支候段、善藏院より沢村庄屋へ相懸ケ合候処、件之式分ハ先達而当役所へ右院より納濟候事と存、夫丈ケ相除割符相極候との旨庄屋申聞候由、さ候へハ全ク壹両四百文余弁納ニ相成、殊ニハ一乘院ノ老母ヲも引取役介いたし罷在、極窮之身分甚及難渋候趣、仍而ハ右式分之内壹分額田村祐介方へ割符被 仰付候様仕度旨、別紙之通善藏院願申出候処、前頭式分丈ケハ善藏院より役所へ先納いたし候由ニ庄屋方ニ而心得居「<sup>(割賦カ)</sup>」、如何行違イ候儀ニ可有之哉、勿論牢□<sup>(扶持代)</sup>計由緒弁納之振ニ相成候儀ニも候へハ、善藏院「<sup>(半貫カ)</sup>」為引受殘金之分俗縁之者等へ弁納為致「<sup>(金共カ)</sup>」、先達而御役所へ及御懸合候儀ハ有之候得共、御□<sup>(金共カ)</sup>未進共組入、一同沢村役人共扱ヲ以割符相極候旨御挨拶有之、其通相決候得共、若右等之趣ヲ庄屋心得差候儀ニも可有之哉、いづれ別紙願之筋も無余儀次第ニ相聞候間、何分宜御判談被下候様致度、願書相添此段及御懸ケ合候、以上

七月廿四日

松本七郎衛門

加藤孫三郎様

(五三二一二)

乍恐以書付奉願上候事

一、沢村一乘院御年具御未進并牢扶持割賦金貳分四百七拾三文、右村役人より四ヶ年賦ニ私共へ申付候二付、何分承知仕、当年賦金貳朱相納候処、此度右之外牢扶持金貳分亦々相納候様ニ御配符ヲ以被 仰付候得共、私共へ是迄右被仰付候儀ハ曾以相覚不申候二付、右之段奉相伺候□<sup>(金共カ)</sup>、沢村役人へ

件之次第承届申上候様ニと被<sup>御付之</sup>□□候二付、早速右村庄屋元へ罷越承届□□庄屋相答候者、牢扶持金式分ハ寺社御<sup>御所</sup>□□最初被仰付候儀と存、其分相除由緒一同□□江も弁金割賦申付候由庄屋答二御ざ候、全ク□□存候者、寺社御役所より牢扶持金式分最初被仰付候儀者相心得候由二御座候、然ル処私儀極困窮二而、寺録も微少二而、今日之経営ニも甚難渋仕候得共、一乘院跡兼職も相勤候間、一乘院老母之儀ハ早速引請役介仕候処、其上弁金兩様ニ而金壹兩四百七拾三文相納候儀ハ、曾以相届兼難儀至極ニ奉存候、勿論其内牢扶持金式分ハ早速指出候様ニ而者、中々以行届不申重々難儀至極ニ奉存候、因茲其分金式分之内壹分ハ、額田村祐介儀ハ私同様一乘院妹相聳同士ニ御座候者、此者方へ追割賦成共被仰付被下置候ハ、私儀も殘金壹分ハ如何様ニも調達仕、当十月中迄ニ上納可仕候、何卒御仁恵之御了簡ヲ以、前書之通牢扶持金壹分御減少被下置候而、金壹分十月中迄御日延被仰付被下置<sup>候ハ、カ</sup>□□難有仕合ニ奉存候、仍如件

文化六年巳七月

飯田村

善藏<sup>善</sup>□

寺社御奉行所

前書、配下善藏院奉願上候通、拙寺一同奉願上候、以上

鴻巣村

宝幢院 印

(五三三)

以廻状得御意候、去ル十二日扱下之者へ別紙写之通御褒美被下置、於拙者難有仕合奉存候、仍而相廻懸御目申候条、御覽乍御世話御順達可被下候、以上

七月廿五日

石川儀兵衛

九郡并見習中宛



一、青銅式貫文

石川儀兵衛扱下

大山村百姓

又兵衛

右之者、持高十七石余之百姓ニ而、幼年之（節カ）養父相果候ニ付、姉へ聳ヲ取本家ヲ相統為致、右之者義  
 八母之丹誠ヲ以潰人之田畑ヲ引請、両家ニ被取立候処、姉聳儀農事疎ニ而潰ニ相成候ニ付、右跡ヲ  
 引請、（當時カ）□□二十四石余之持高ヲ耕、右之内ニハ（租）鹿土地（も有之候へ共カ）「（役）」、荒処ニ不相成候様心懸、質素  
 ヲ専農事（其致カ）□□出精候故、勝手向相応ニ相成、諸上納向等村□□人□（役）催促無之内相納候様心懸、御在  
 國中ニ付而者、乍少々御用金ヲも指上候由申出候趣も有之、件之通農事甚致出精上納向等大切ニ心  
 懸候段奇特之至候、仍之為御褒美青銅被下置候条為取可申もの也

一、青銅式貫文

同人扱下北方\*

百姓

三郎衛門

右之者、村内八衛門与申者へ養子ニ相成、持高十三石七斗余之百姓ニ有之候所、困窮郷ニ而田畑荒  
 地も多分出来、四十ヶ年已来夫金雜石御免并畑方拔土免等之御救相立候得共、右之者儀ハ持分之内  
 壹畝壹歩之場所も不荒、御救ヲも不相願、今以本免之御取付ニ而収納いたし、尚亦妻之弟忠吾与申  
 者相果候後、老幼之者三人引請役介致候処、乍老年も農事甚致出精候故、勝手向相応ニ而、凶年之  
 節たり□□（共天食）等さし支無之、却而困窮人共へハ夫々ニ相救□□（候様心）懸、上納之儀も村役人より催促無  
 之内相納□□（候者之由）、申出候趣も有之、件之通農事致出精上□□（箱向等）大切ニ心懸候段奇特至ニ候、仍之  
 為御褒美青銅被下置候条、為取可申者也

一、青銅式貫文

同人扱下

(五三三)  
 \*北方村 きたかた村（茨城郡）。  
 増井組に属する。現東茨城郡城里町  
 北方。

大山村百姓

要三郎女房

なみ

(五二二)

\*癩病 らいびょう。ハンセン病のこと。

右之者、夫要三郎儀持高十石余之百姓ニ而農事出精いたし候処、癩病<sup>\*</sup>相煩農事も不行届ニ付弟林衛門与申者へ跡相讓、自分二者別宅致取続居候処、一兩年ハ別而癩病不宜、面体も見苦敷、農事も相成兼、弟林衛門儀ハ自分経営も不行届身売奉公ニ罷出、見継候段ニハ無之処、右之者鍬鎌ヲ取致耕作、病夫并幼年之子供ヲも致介抱候由、申出候趣も有之、件之通<sup>(農カ)</sup>事致出精候段奇特之至候、仍之為御褒美青銅被下置候条、為取可申者也

(五二四)

以廻状得御意候、扱下長貫村儀平次へ、別「<sup>(紙之通カ)</sup>」御ほうひ被下候旨御達御座候間、相廻懸御目申候、御順達可被下候、以上

六月十五日

白石又衛門

九郡宛

一、青銅七貫文

白石又衛門扱下

長貫村百姓

儀平次

右之者、植物方御用申付御扶持ヲも被下置候処、去ル申より去辰迄諸木苗四万六千四百本余自分ニ而実伏いたし植立指出候由、申出候趣も有之、件之通存入宜御立山植立等致出精候段奇特之至候、依之為御褒美青銅被下置候条、為取可申者也

(五二五)

七月廿五日仕出御用

- 一、本米崎村豊三郎致盜候儀、前留之通御奉行衆へ申出候事并同役へ廻状ヲも仕出候事
  - 一、郷士御目見之儀二付、別留之通再願御催促指出候事
  - 一、油繩子村稗御藏御普請釘之儀、御普請□□御断、前留之通御用人衆へ指出候事
  - 一、安藏儀左衛門川尻村廿分一改役被仰付候付、為御知四通、別留之通筋々へ指出候事
  - 一、栗田七郎衛門殿知行高辻書付大図与申文義、書直シ吟味方へ指出候事
  - 一、六月九日幸八郎仕出廻状 一、七郎衛門知行御断再促之廻状都合式通鳥子へ廻候事
  - 一、本多越中守殿通り二付御舟御断之廻状 一、忠八郎実母病死之為知廻状浜田へ廻候事
  - 一、御矢倉方納真木<sup>\*</sup>之廻状常わへ返候事
  - 一、黒鋏荒子通人割廻状 一、雨乞申出候廻状
  - 一、俊祥院様御忌日之廻状 一、諸同心已下忌服之廻状
- 右、大里へ廻候事
- 一、御先君様方御成被遊候ケ所々申出、前留之通書入忠次郎相願御通事衆へ指出候事
  - 一、上高場村黒鋏藤次衛門為指登可申哉之段、前留之通鈴木専衛門方へ及文通候事
  - 一、安藤理部衛門弁納之義二付、別留之通安藤市<sup>(左衛門)</sup>□□及文通候事

(五二六)

覚

八月十六日

田中々村郷士

御昼

大内勘衛門

同日

大久保村同

御泊

岡部新次衛門

(五二五)

\*矢倉方 矢倉奉行。矢倉(やぐら)は武器を納めておく倉。矢倉を管理する役所を矢倉奉行または矢倉方と云った。

\*真木 まき。杉や松などの木の総称であるが、ここでは薪の意で、燃料に用いられる割木をいう。農民の農間稼ぎとして真木割り(まきわり)が行われた。

十七日

介川村郷士並

御昼

武藤弥大夫

同日

同村郷士

御泊

長山半兵衛

十八日

川尻村

御昼

舟庄屋

十九日

磯原村郷士

御昼

野口友次郎

右北浜筋 御成之節 御昼休 御旅館場前書之通可申付奉存候、仍而ハ御道具掛・御手水場・御雪隠\*等為取初立申度奉存候間、否早速御達可被下候、且郷士之儀者何れも 御成奉願候儀ニ御座候間、手前物入を以手輕ニも補修可申候へ共、川尻村御昼休場之儀ハ木品所相場を以御買上ニ仕、追而代鏝上より被下置候様仕度奉存候、此段奉伺候条、先達而奉願候郷士共御目見願等一同早速御下知可被下候、仍而此段申上候、以上

七月

加藤孫三郎

(五二七)

覚

金貳兩

右、扱下高原村百姓兵三郎留置候小兒養育致度段願ニ付、其節申上、前書之通御金「(被下置カ)」候段御達ニ付、困窮者ニも候間、於役所指替早(金奉)相渡候所、此度親里相分り候間近々由緒之者等請取ニ罷越候義与奉存候、仍而ハ右金子返納為仕可申候へ共、最早当人へも相渡候上、是まで数月役介をも致置、猶又他所向へも拘候義ニ御座候間、相応之仕着ヲも為着、見苦敷無之様仕為相渡申度奉存候間、被下

(五二六)

\*雪隠 せっちん。便所。かわや。手洗いのこと。

流二相濟候様仕度此段奉伺候、以上  
右、被下金伺之通相濟候段御達之事

七月

加藤孫三郎

(五二八)

七月晦日仕出御用

- 一、高原村兵三郎被下金被下流之義、前留之通御奉行衆へ指出候事
- 一、川尻村廿分一役御達書致返上候事
- 一、郷土共御旅館願、前留之通権藏殿相願、前留之通御奉行衆へ指出
- 一、油繩子村稗藏之釘請取手形受弘方廻ス
- 一、八田・増井扱下之者御慰勞之廻状同所へ廻ス

(五二九)

申達候儀有之候条、其旨御心得出府可被有

(之儀、以上カ)

八月朔日

興津所左衛門

加藤孫三郎様

(五三〇)

御扱下本米崎村百姓彦三郎与申者疑心之筋も有之候由にて、去ル廿三日大里村小屋之者於下河合村ニ  
召捕指出候ニ付相札候所、於所々少々之鑑等かたり致候旨、尤一体身持不宜ものニも有之歟にて、去  
ル丑年御役所御札ニ而入獄被仰付、御新葬御大赦ニ而出牢被仰付候旨申述候、此段及御掛ケ合候条  
御追放帳外等之者ニも有之や、又八前々何御答ニ而入獄被仰付候哉、委細御報ニ被仰聞候様旁得御意  
候、以上

(五三〇)

\*下河合村 しもかわい村(久慈  
郡)。大里組に属する。現常陸太田  
市河合町付近。

七月晦日

石神組

大里組

(五三二)

扱下天下野村御山横目へ、去ル十日別紙写之通〔<sup>被仰渡候</sup>〕於拙者難有仕合奉存候、右之段得御意候条、

乍御世話〔<sup>願</sup>〕覽可被下候、以上

六月十七日

九郡宛

岡野庄五郎

一、

岡野庄五郎扱下

天下野村御山横目

兼帯庄屋

木村孫左衛門

右之者、山横目・庄屋両役相勤東染村庄屋ヲも兼帯いたし、居村ハ勿論支配村々迄心ヲ用懇ニ取扱、御益筋致勤弁御用向抽テ致出精候二付、去ル亥年中一代苗字上下御免被遊候所、其後中染村庄屋ヲも兼帯申付候二付別而心ヲ用、風義取直子育之儀も存入厚、自分入目ニ而育子教訓之書為致彫刻、他村迄も致施書小人とも行状をも懇ニ致教戒、去ル亥年中村内病難ニ而潰絶前人も出来候所、願之上越後へ罷越、奉公人召抱、自他村江相配り、□□人物相撰、人元へも掛ケ合之上三拾四人御国人別二組入にて潰人分手余之土地相渡、新百姓三軒取立、右入目被付□□而已ニ而ハ致不足候所、近年百姓共骨折ヲ厭商ヲ好□□通筋へ致博奕宅候風儀ニ相成、田畑手余出来候基ニ付、□□数〔<sup>人カ</sup>〕ヲ定株証文相渡置、少々ツ、運上取立候分金三拾兩程ニ相成、尚又右之もの小毛見御用相勤候節、御褒美金溜置候等ヲ以右之不足を補候由、水蒟蒻＊・紙漉等産業之義も厚ク心ヲ用、追々取殖、御立山之儀も無油断相廻り自分入用を以松杉栗苗等実伏いたし、土地方勘弁之上植立用水普請材木手支無之様、心掛

(五三二)

＊潰絶前人潰〔つぶれ〕は潰百姓のことで年貢・諸役の重荷・災害等で破産した百姓。絶前人〔ぜつまえにん〕は、後継者の不在で絶えた百姓。

＊奉公人 主家の家業や家事に従事して、労働を提供する者の総称。主人の身分や働く期間によって、様々な種別があった。(一八七―一) 身売奉公人を参照。

＊新百姓 他所から新しく入ってきたり、分家などにより取り立てられた百姓。ここでは、潰・絶前人の跡地を継承した百姓。

＊水蒟蒻 〔<sup>漉</sup>〕しみこんにやく。蒟蒻を原料に寒中にさらして凍らせてつくった保存食品。久慈郡天下野・高倉村一帯で生産され、江戸へ出荷された。

＊紙漉 かみすき。紙を漉くこと。楮の皮をたたき、川水でさらした紙料をとろろあおいを混ぜた水とともに紙船に入れて簀〔す〕と桁〔けた〕で漉きあげて紙板で乾かして作った。

ケ、公事掛ケ合等も無之、村々穩取扱、万端質素ニいたし家業別而出精旁功勞(も)有之者之由、申出之趣も有之、件之通心ヲ用致出精候段奇特之至ニ付、別段之儀ヲ以一代帶刀御免被遊候条、猶更出精相勤候様可申渡者也

(五三二)

以書付致啓達候、加倉井村出郡次与申者、血付候单物着致居候趣相聞、仍而ハ先達而御(願)状ヲ以得御意候変死人、右之者仕業ニも「(可有之)」哉与召捕致穿鑿候所、去月八日御扱下(付)□□佐兵衛与申者所ニ而、右佐兵衛并大里扱下三才(付)□惣五郎悖助八・右郡司三人ニ而酒相用候処、酒狂之上及口論、佐兵衛目の下へ助八脇指ニ而疵付候付、双方取訊内済之入割いたし、其節单物へ血付候由申述候間、一ト通村方御糺之上、御決早速被仰聞候様致度存候、以上

七月廿九日

岡野庄五郎

加藤孫三郎様

右之通申来候ニ付、村方相糺候処、介八と及口論ニ候ニハ無之、却而郡次と佐兵衛兩人ニ而及口論ニ候、介八取訊ケ候旨、尤いづれも無刀ニ付、脇指疵ニハ無之候旨申出候間、其段及返書候事

(五三三)

里川筋町屋橋下より落合迄之間鮎・鯉・鱒運上場ニ御座候得共、右川筋御鷹場已来殺生留置候所、鮎・鯉之儀ハ少分之儀ニ付指留置、鮎之儀ハ当三月より八月迄殺生御免之内鮎運上是迄之通申付度旨、当三月中加藤孫三郎方向之上相済候付、右請負入札村々へ相達候

入江忠八郎扱下三才村之もの落札ニ相成候、落札人より川筋村々へ札相渡殺生為仕候由之(願)□、鮎殺生之儀ハ八月下旬より九月中ニ無之候而ハ魚無之村々殺生人共札買請不申、此上運上鑑納ニもさし支難儀仕候付、九月晦日迄殺生御免之儀願申出候所、無扱次第ニも相聞申候間、此上御鷹場中之儀ハ、鮎運上三月朔日より九月晦日迄御免被下候様仕度、此段奉伺候、以上

(五三一)

\*公事 くじ。私人間の紛争。現在でいえば民事に相当する。また訴訟と同意で用いられることもある。

(五三三)

\*殺生御免 殺生とは生きものを殺すこと。沼川に殺生場が設けられ、藩の殺生御免により鳥魚の捕獲が許された。

七月

山口直次郎

右伺之通、一与月御免ニ相成候旨、御奉行衆より御達有之段、為心得大里組より相廻候事

(五三四)

覚

役所見習

佐川与三郎

右、役所支配手代廻り合兼候付、伺之上先月中御雇相済居候へ共、諸御用数多相残り如何様(二もカ)□□繰合兼候付、又々当月中御雇続伺申出□□(候へ共カ)、未何等之御達無之指支候間、早速御下知御座候様仕度奉存候、仍而此段奉伺候、以上

八月四日

加藤孫三郎

(五三五)

覚

五寸錠三ツ錠共

但、大坪九ツ座鉄共内三ツハ割爪

右、油繩子村稗御蔵御普請二付、前書之品々御渡ニ相成候旨当春御達御座候所、此度御普請相初立候間相渡候様吟味方へ御断可被下候、以上

八月

加藤孫三郎

(五三六)

御扱下友部村市之節、当三月中博奕場所一件へ拘候和田村介八義、此程見当候旨御(訴カ)□□出候間、太田村へ入牢申付置穿鑿相掛□(候カ)義ニ御座候所、右一件御糺口書無之候而ハ□□糺方不同も出来可申哉、旁御



穿鑿一卷□□御廻し可被成候、此段急キ得御意候、以上

八月五日

大里組

石神組

右、当時口書別高へ廻し置候付遣兼候間、近々役所ニ而可致穿鑿候間、やはり入牢申付置呉候様、返書遣候事

(五三七)

八月五日仕出御用

- 一、天下野村御山横目御慰方之廻状、小菅へ廻候様
- 一、松杭木之廻状、常葉へ廻候事
- 一、孝行貞節之もの申出、別留之通御奉行衆より申出候事
- 一、五寸錠之御断忝枚、前留之通御用人衆へ指出候事
- 一、川尻村久十郎宅御普請之義ニ付、別留之通御用人岡部忠藏殿へ及御答候事

同日帰御用之分

- 一、油繩子村稗御藏土地代御買上金請取手□<sup>(形カ)</sup>、山之位付相廻候様、御勘定所より申聞候由申来候事
- 一、卯年分大工未進鏝并去辰年納木払代鏝手形書替、御勘定所より催促有之候由申来候事

(五三八)

以廻状得御意候、去ル十二日扱下之ものへ別紙写之通御褒美被下置、於拙者難有仕合奉存候、仍而相廻懸御目申候条、御覽乍御世話御順達可被下候、以上

七月廿五日

石川儀兵衛

九郡宛

一、青銅式貫文

石川儀兵衛扱下

大山村百姓

又兵衛

右之者、持高十七石余之百姓ニ而、幼年之養父<sup>(節カ)</sup>相果候ニ付、姉へ聶を取本家を相続為致、右之者義者母之丹誠ヲ以潰人之田畑ヲ引請、兩家ニ被取立候処、姉聶義農事疎ニ而潰ニ相成候ニ付、右跡ヲ引<sup>(請、当カ)</sup>□□時二十四石余之持高ヲ耕、右之内ニハ籠土地<sup>(も有之カ)</sup>□□候へ共、荒所ニ不相成候様心懸、質素ヲ專<sup>(農事)</sup>、□□、甚致出精候故、勝手向相応ニ相成、諸上<sup>(納向等)</sup>□□村役人より催促無之内相納候様心懸、御在<sup>(國中ニ付)</sup>□□□□而者、乍少々御用金ヲも指上候由申出候趣も□□<sup>(有之)</sup>、件之通農事甚致出精上納向等大切ニ心掛候段奇特之至候、依之為御褒美青銅被下置候条為取可申者也

一、青銅式貫文

同人扱下北方村

百姓

三郎衛門

右之者、村内八衛門与申者養子ニ相成、持高十三石七斗余之百姓ニ有之候処、困窮郷ニ而田畑荒地も多分出来、四十ヶ年已来夫金雜石御免并畠方拔土免等之御救相立候得共、右之者義ハ持分之内壹畝壹歩之場処も不荒、御救ヲも不相願、今以本免之御取付ニ而収納いたし、尚亦妻之弟忠吾与申者相果候後、老幼之者三人引請役助<sup>(念)</sup>致候処、乍老<sup>(年)</sup>□□農事甚致出精候故、勝手向相応ニ而、凶年之節たり共夫食等指支無之、却而困窮人共へハ□□<sup>(天々カ)</sup>相救候様心懸、上納之儀も村役人より催促無<sup>(之内カ)</sup>□□相納候者之由、申出候趣も有之、件之通□□<sup>(農事カ)</sup>致出精上納向等大切ニ心懸候段奇特之至□□<sup>(二候、依之カ)</sup>為御褒美青銅被下置候条、為取可申者也

一、青銅式貫文

同人扱下

大山村百姓

要三郎女房

なみ

右之者、夫要三郎義持高拾石余之百姓ニ而農事出精いたし候処、癩病相煩農事も不行届ニ付、弟林衛門与申者へ跡相讓、自分ニハ別宅いたし取統居候処、一兩年ハ別而病氣不宜、面体も見苦敷、農事も相成兼、弟林衛門義ハ自分経営も不行届身売奉公ニ罷出、見継候段ニハ無之処、右之もの鍬鎌を取致耕作、病夫并幼年之子供をも致介抱候由、申出候趣も有之、件之通農事致出精候段奇特之至候、依之為御褒美青銅被下置候条、為取可申者也

(五三九一一)

扱下開江村伝七と申もの、当四月中風□□<sup>大岩カ</sup>家出致行衛不相知候ニ付、御扱下々へも御達□□、其砌得御意候間御世話共ニ相成候処、此度□□<sup>大岩カ</sup>村ニ而右由緒之もの見付候旨、別紙之通御座候間、仍而此段得御意候条御順達可被下候、以上

七月廿九日

九郡宛

小原忠次郎

(五三九一一)

(五三九一二)

乍恐以書付御訴奉申上候事

開江村

伝七

年七十式

右之者儀、当四月中風与罷出行衛不知候付、其砌御訴申上置候処、此度大岩村通り筋ニ而由緒之もの見付候間、乍恐御訴奉申上候、誠ニ老衰仕此上安心不仕候間、飯富村<sup>\*</sup>由緒之内へ指置申候、御苦難ニ

\*大岩村 おおいわ村(那珂郡)。鷺子組に属する。現常陸大宮市大岩西と南北が高岩山などの山地となっている。

\*飯富村 いいとみ村(茨城郡)。常業組に属する。現水戸市飯富町水戸城下の北西部にあり、東は低地、西は台地となっている。台地のすそを那須街道が通り、南で日光道に分かれる。

罷成、当人ハ尚更村役人一同奉恐入申候、老人之儀此上御仁惠偏ニ奉願上候、仍如件  
文化六年巳七月

右村

庄屋

富衛門 印

与頭 三人 印

御郡御奉行所様

(五四〇)

相渡シ申一札之事

一、わた入 但、しま三ツ 一、裕内沓ツ母着類ヲ直ス (三ツカ)

一、单物 三ツ 〆九品皆子供分

外ニ

一、鏡 沓枚 一、帯 沓筋 一、小ふとん (布团) 沓ツ

〆三品 病死之女所持之品

右之通り、村方百姓猶吉女房親子之品々并小児共ニ慥ニ相請取申候、此上何ニ而も出入申分少も無御座候、仍如件

文化六年巳八月二日

宍戸領小泉村

与頭 作衛門 印

由緒

庄藏 印

水戸様御領高原村

兵三郎殿

(五四一)

以書付致啓上候、秋暑之節御安康被成御勤仕珍重奉存候、然者御支配所高原村兵三郎方へ当二月中罷越相果候女者、当御領内小泉村猶吉妻二付、右娘引取候様此間被仰聞候付、村方相糺候所、右猶吉義甚困窮□□□□<sup>(成者二而)</sup>妻子之養育も難相届、去年中宿元二不罷在候二□□□□<sup>(命右女)</sup>義ハ土浦領岩間村内小山と申候所百姓茂十と申□□□□<sup>(男)</sup>娘二付、子供、三人召連、去辰十月中右茂十方へ罷越役□□□□<sup>(介)</sup>相成居申候、右女之母ハ茂十方不縁二相成、同領和泉村仙寿院再縁罷在候由、右二付猶吉妻義、去十一月下旬実母方へ手伝二參候旨二而未女ヲ召連茂十方ヲ立出、其後行衛不相知罷在候由、扱又猶吉義ハ当時当御領随分付村二奉公仕罷在候□□、左候得ハ右女ヲ召連罷越候男ハ猶吉二ハ無御座別人二御ざ候、仍而兵三郎方二而養育二相成候娘二ハ実親之儀ニも候間、猶吉罷越引取候様申付候所、右様困窮ニ而奉公致候身分故、引取之手当も難出来、縁父茂十方へ為申談候所、是以困窮老年ニ而難相届、外ニ可然親類も無御座候付、如何様ニもいたし引取候様申付候付、漸々路用路用<sup>(マ)</sup>而已致手当、右猶吉へ村役人之内作衛門と申者指添指遣申候、高原村兵三郎始村役人等彼是世話ニも相成候義二付、相応之謝礼等も可致義二候得共、前文之通ニ而夫迄ハ難相届候二付、何分勘弁□□□□<sup>(被致度)</sup>小兒計相渡具候様、右村方へ御下知被仰付被下□□<sup>(度)</sup>奉□□<sup>(存候)</sup>、仍之夫々之者一同右兩人指遣申候儀ニ御座候、右之段得□□□□<sup>(御座候)</sup>如此御座候、以上

七月廿九日

島崎八郎左衛門

加藤孫三郎様

尚々、本文猶吉義早速指遣可申筈之所、彼是指支共有之、其上病氣ニ而延引ニ罷成候、不慮之儀出来何角御辛勞ニ罷成御世話之段忝奉存候、以上

(五四二)

以書付致啓上候、秋暑之御弥御安康被成御勤仕珍重奉存候、然ハ此節 円曉院様御墓御普請取掛り申候二付、御石碑石・御台石等者町屋村ニ而受取相済申候所、伽羅石・真沢石者御支配下白羽村・茅根村ニ御座候由、右御入用石之義前例之通江戸表ニ而御願之上相済居候間、御断も相廻居申候哉、員

(五四一)

\*岩間村 いわま村(茨城郡)。上郷と下郷に分かれる。土浦領。現笠間市上郷・下郷。

\*随分付村 なむさんづけ村(茨城郡)。現笠間市随分付。宍戸藩領であった。

\*路用 ろよう。旅行用の費用。路銀、旅費。

数之儀ハ伽羅石百枚・厄木石百五拾程御入用ニ御ざ候(開カ)、早速為御渡被下候様致度奉頼候、尤代役之内元ノ海老沢(字カ)□□□申者、瑞龍并町屋村へ当時指出置申候間、右之(表カ)□□□□□為御渡被下候様致度、御渡御日限も右方へ御沙汰被仰(開候様致度カ)□□□□奉存候、仍而此段得御意候、以上

七月廿九日

島崎八郎左衛門

加藤孫三郎様

(五四三)

扱下高原村兵三郎江預置候小兒一件、御達之通私共より宍戸御郡奉行中江及文通候所、小泉村百姓猶吉子供ニ相違無之由ニ而右之者并由緒等為迎、去ル朔日役所へ罷越候ニ付、右右村支配御山横目取扱申付候所、着類等迄見苦敷無之様仕、翌二日相渡遣候旨村方より訴出候間、此段得御心得ニ申上候、以上

八月

加藤孫三郎

(五四四)

以書付致啓上候、扱下稲田村江筋御普請之儀、委細春中及御掛ケ合候所、御支配永井長衛門へ被仰付候由ニ而、右御入目帳此度相廻候趣、乍御用も別而御世話ニ相成候事ニ御さ候、此段得御意度如此御座候、以上

八月十日

加藤孫三郎

小原忠次郎様

(五四五)

覚

佐川与三郎

右之もの、御雇続伺相済候ニ付、去ル三日申付候、仍而此段為御知申上候、以上

八月

加藤孫三郎

(五四六)

以書付致啓達候、扱下稻田村江筋御普請之儀、委細春中及御懸ヶ合候処、御支配永井長衛門へ立合被仰付候由ニ而、右御入目帳此度相廻候趣、乍御用も別而御世話ニ相成候事ニ御座候、右之段得御意度如斯御ざ候、以上

八月十日

加藤孫三郎

小原忠次郎様

(五四七)

以書付致啓達候、当六月中扱下内田村茂衛門後家明藏へ悪ルもの共寄合致博奕候ヲ支配之もの見咎、右之内茂宮村幸三郎与申<sup>(音マ)</sup>□□捕遂吟味候へハ、田中々村左衛門と申者も□□候由ニ付呼出候処、右之ものハ修驗大法□□<sup>(院弟マ)</sup>ニ而御支配人別之旨村役人申出候間、御糺被成□□<sup>(候様マ)</sup>致度、口書一卷相廻懸御目ニ候条、御糺相濟□□<sup>(次第マ)</sup>口書一卷ハ御返ニ致度此段得御意候、以上

八月

加藤孫三郎

松本七郎衛門様

(五四八)

郷中百姓共綿服着用ニ被仰出候ニ付、御制禁相犯候者過料員數了簡之上申出候様再応御達ニ付、左之通奉伺候

一、御制服着用致候者、過料鑿五百文

一、忝家中ニ而兩度も犯候者有之候ハ、忝度目ニ着用之品取上、其家之本人閉戸五日

品取上之儀、先達而相伺候処、取上ケ之儀ハ相止過料ニ申付候様御達御座候得共、一家ニ而再

犯之儀ハ初メ而犯候共違候へハ、一ト通之心得違と申ニも無之、御法ヲ等閑ニ心得候儀御座候間、一統響合之ため其品引上ケ候様仕度存候、尤件之通別而不束之意味も御ざ候へハ、品引上候而已ニ而ハ相当不仕候様奉存候間、本文之通申付<sup>〔可然〕</sup>□□奉存候

一、村役人共之儀、申付不行届故ヲ以過料被仰<sup>〔存候旨〕</sup>□□御達も御ざ候処、離坪・手遠之場所其外共□□□とも忍ニ致着用候儀ハ、村役人共悉御相□次第行届兼申候事も御座候間、其村ニ而一兩人位見咎候者有之分ハ何等之沙汰ニ不及、三人以上も犯候者出来候ハ、庄屋并同様犯科之者有之支配組頭過料五百文ツ、ニ申付、其余数人相犯候者有之候ハ、其品ニより呵・押込・閉戸等ニも申付可然奉存候

一、御町之者御制服着用いたし候ヲ、支配共郷村ニ而見咎候節御町方へ相届、右役所ニ而過料等申付、亦□郷村之者御制服着用いたし御町へ罷出候ヲ、御町方ニ而見咎、扱役所へ届来候儀勿論之事ニ候得共、右之次第御町・郷中之者弁居不申候而者心得之弛ニも罷成候間、右之趣郷中へハ申触置候様可致奉存候条、御町人も心得之ため、件之次第右役所より兼而申触置候様、御達被下度奉存候右御懸ケニ付、一同判談之趣申上御下知奉伺候、以上

七月

御郡奉行共同然

右之通、目論之上御城下同役より相談有之処、存意無之宜敷取扱具候様及挨拶候事

〔御付札〕\*

御制禁ヲ犯候当人と村役人之過料同数も如何敷候間、当人七百文共為登可然坎、乍去当人五百文之過料ハ、前例之事ニ相違居置可然候ハ、村役人之過料ハ三百文ニも可然歟、いつれ役人当人との差ハ有様にて可然存候、以上

小原忠次郎

(五四八)

\*この付札は(五四八)の上段に横書<sup>ヨコ</sup>されている。



(五四九一)

下孫村金兵衛御細工御用罷出相勤候様、別(紙之通)□□□長哲申出候条、孫三郎方へ御達之儀宜御取計可被成候、(以上)□□

八月八日

藤田次郎左衛門様

岡部忠蔵

尚々、本文之儀二付、金兵衛へ長哲より御用申遣候由書状指出候条、是亦相届候様旁宜御取計可被成候、以上

(五四九二)

下孫村

仏師

金兵衛

右之もの、御細工御用中 御殿御細工場へ罷出相勤候様石神御郡方へ御達可被下候、以上

八月八日

中田長哲

(五五〇一)

以廻状得御意候、步附御材木運送賃錢四ヶ一上より被下置候儀二付、別紙之通御達御座候処、指支之筋も有之付、申出書目論及御相談候意味者、右申出之趣二而相分申候、何分御添削之上早速御順達留りより御返可被成候、以上

八月十日

藤田次郎左衛門

小原忠次郎

加藤孫三郎様 岡野庄五郎様

尚々、次郎衛門殿等より御指出之口上覚書ハ追而相廻候様可致候、先達而御相談之通、実者右運賃 上より被下ニ仕度候得共、此上申出候而も相届兼可申与<sup>(寄カ)</sup>□存候間、是非堪候而草稿之通目論之事ニ御座候、以上

去辰年、歩附方御材木取多分ニ而、山元并運送村々難儀之由ニ而、運送御雇錢等被下候儀、再応申出候得とも難相濟事ニ付、御領中割物ニ可取扱旨相達候得とも、又<sup>(候カ)</sup>□小宮山次郎衛門・増子幸八郎口上書を以申出<sup>(候カ)</sup>□趣も有之候処、歩附方定法之賃米被下候上ハ、無ちんニ而召仕候事ニハ無之候間、何レニも上より被下候様ニハ難相濟事ニ付、別紙口上書相返候、併去々卯年半知御借上ニ而諸御ふしん向も相止居、二三ヶ年分<sup>(候カ)</sup>之御入用材去辰年一時ニ御材木取被仰付候姿ゆへ、多分ニ相成、村々難儀も指見候間、格別之御仁恵を以、御帰国ニ付御入用分<sup>(候カ)</sup>之御材木ニ限り、運送請負賃四ヶ一 上より被下置候条、四ヶ三八追々相達候通惣<sup>\*</sup>郷割物ニ取扱候様可被致候事

但、本文

御帰国御入用分と常輪分御材木挺数并請負賃とも引分可被書出事

(五五〇一二)

去辰年、歩付御材木多分山取為致、運送ちんせん 上より被下候様追々申上候ふりも有之、尚又次郎衛門等より御老衆江口上覚書をも指出候処、難相濟由ニ而右<sup>(マ)</sup>右口上書御返ニ相成、尤多分御材木取ニ付村々難儀も指見候間、格別之 御仁恵を以、御帰国ニ付御入用御材木限り、運送受負ちん四ヶ一上より被下置候条、四ヶ三者追々相達候通惣郷わり物ニ取扱可申旨御達之趣承知仕候、然ル処去辰年中山取為致候御材木之内、御帰国御用与御断在之分も相見候へ共、何レも至極御指急キ早々不相廻候得者、当三月中 御帰国御問合兼候由ニ而過急ニ御催促御座候付不得止事、去秋中霖雨ニ付郷<sup>(中)</sup>□人馬通行不相成程之砌、尚また郷中麦作時付稻苻いづれも肝腰之時、農業をも打為置御材木運送為致、尤

(五五〇一三)

\*賃米 ちんまい。労働の報酬、つまり賃金。当時は金銭でなく、米などで支払われることが多かったの  
で、こう呼ばれる。

\*物郷 領内のすべての村を総称している。

(五五〇一四)

\*老衆 おとなしゅう。発生は室町時代で、惣村の運営を中心になつて行つた指導者。文中でも、村落の指導者、リーダーをさして使われている。

常輪之分ニ御座候得者、先年より農隙を以山取并運送為仕来候処、前文之通御指掛り御用之よし御催  
促ニ付、御材木取并運送為仕候事ニ御座候、仍常輪并御帰国御用分与引訳旁、尤去辰春中より当春御  
帰国已前まで山取為致候分より都而、右御用之由御催促ニ付、歩附寸組支配廻り合兼候付、去春中よ  
り御雇用人伺之上相済木取為仕、且村々ニ而も 御帰国ニ付御急と相心得運送も仕候間、四ヶ一 上  
より被下置候御了簡ニ相済候上者、□□四ヶ一被下置候得者村々一様ニ罷成候処、御帰国御用常輪御  
用と兩様ニ引訳候而者、村々□□出来郷中氣受も如何敷可有御座<sup>(候御用)</sup>□□奉存候、御城下近々之村々相  
傷候故を以、右運ちん受負ニ仕惣郷割之儀も一応者御達出候程も御次第之処、四ヶ一を 上より被下  
相済候故を以、御帰国御用分を引わけ候二も及不申候事之様奉存候、伺ハ次郎衛門与兩人口上書を  
以奉願候通御了簡相済候様仕度奉存候とも、難相済義を又々奉願候も恐入候間、去辰正月より六月  
迄之分を定式歩付勘定を以、半分分御勘定指出相済候間、右之分ヲ常輪御用分与引訳、同七月より  
十二月迄之<sup>(分者)</sup>□□当正月より追々御達之上山取候□、いづれも 御帰国御用分ニ御座候間、右運<sup>(送カ)</sup>□ちん  
受負を以、御材木方へ為相送候□□并御入用辻追而相仕出候様可仕奉存候、仍而ハ去七月已来之分ハ、  
元山工数扶持米手形相仕出候而已ニ而、御勘定無之旨御勘定所へ御断置可被下候、仍此段申上候、以  
上

八月

御郡奉行共

(五五〇一三)

以廻状得御意候、国役金掛無之永引等之訳書出候内、船頭給と寺社除地へ組書出候儀ニ付、別冊書出  
候付札之通心得候様、尚亦去辰年分役金取立高仕出壹冊、大吟味役より心得之為相廻候間、御廻申候  
条、留り御役所より大吟味方へ御返可被成候、以上

六月五日

藤田次郎左衛門

九郡宛

表書

朝鮮信使対州迄来聘二付 水戸領国役金取立高
--------------------------

一、惣高參拾五万石

内高貳万貳千四百四拾九石三斗五升九合

是者寺社領并前々より謂有之無役高除之

残高三拾貳万七千五百五拾石六斗四升壹合

此高役金六百五拾五兩永壹文貳分八厘

此銀六匁六分五厘四毛

但、村高百石二付永貳百文ツ、

兩替金壹兩二付六十五匁七分ノ積

但、後藤包  
常是

外

一、高貳千貳百六拾石六斗余

但、領知高之外 御朱印地寺社領之分

常州七郡之内  
野州壹郡

村数五拾壹ヶ村

右ハ、此度朝鮮信使対州迄来聘二付、村高百石二付役金壹兩ツ、可取立処、去辰より来ル申迄五ヶ年

常州  
野州 村数五百九拾    (貳ヶ村也)

二割合可相納旨被仰渡候付、去辰年分書面之通領知村々より取立候、四月廿九日御代官恩田新〔八郎、九〕  
相納申候、以上

文化六年巳五月

水戸殿

大吟味役

田丸安〔之九〕

櫻井〔通〕  
〔市之元〕

御勘定所

(五五〇―五)

表書

今度朝鮮信使対州迄来聘二付  
水戸殿領分国役金掛無之  
御朱印地并寺社余地永引等之訳書出

常陸国茨城郡百三拾七ヶ村之内

一、高七千六拾三石九斗四升五合

○八百石

\*東照宮御祭礼免

内○六百四拾九石壹斗六升壹合

寺社除地

○内拾三石四斗八升 新田分除地組入

○五千六百拾四石七斗八升四合

廢地并用地等都而永引

〔同カ〕□国那珂郡百四拾貳ヶ村之内

一、高五千八百五拾七石八斗貳升六合

〓 ○三百貳拾九石貳斗四升七合

寺社除地

(五五〇―五)

\*東照宮御祭礼 水戸東照宮で毎年四月十七日に行われた祭礼。神輿と供奉の行列が上町、下町を廻り盛大に行われた。

内 ○内八拾式石七斗七升七合 新田分除地組入

○五千五百式拾八石五斗七升九合 前同断永引

内九斗六合先書出書誤ニ而、船頭給ヲ寺社除地へ組入候由ニ而、此度書出候ハ除キ指出候所、先調出来再応御勘定所内見も出シ、殊ニハ郡違等共違イ除地ハ廢地之高辻狂イ如何敷候付、やハリ先調之通除地へハ組候事、尤除地書出村名并院名等微細ニ書出ニ相成候ニ付、市毛村無ニ亦寺除地高へ九斗六合空ニ組込指出候間、已来 公儀書出も有之節ハ可心得、仍而無ニ亦寺除地高六拾石九斗六合ニ書出候、 全ク之除キ高ハ六拾石也、 旁可心得事

同国久慈郡百七拾壹ヶ村之内

一、○高五千百七拾八石四斗三升四合

○四百石

菩提所稻木村久昌寺并同所三昧堂□□寄付

内○四百七拾五石式斗八升

寺社除地

四千三百三石壹斗五升四合

前同断永引

同国多賀郡 七拾六ヶ村之内

一、○高千七百六拾九石五斗三升式合

内 七石九斗八合

寺社除地

○千七百六拾壹石六斗式升四合

前同断永引

同国鹿島郡 七ヶ村之内

一、○高三百三拾九石八升壹合

○拾石五斗壹升四合

寺社除地

内○内六石四升四合 新田分除地組入

○三百式拾八石五斗六升七合

前同断永引

同国行方郡式拾七ヶ村之内

(五五〇—五)

\*市毛村 いちげ村(那珂郡)。常葉組に属する。現ひたちなか市市毛。

一、高三百貳拾八石六斗六升七合

内 ○拾四石七斗五升貳合  
寺社除地  
○三百拾三石九斗壹升五合  
前同断永引

同国新治郡拾四ヶ村之内

一、高貳百貳石七斗三升四合

内 七石八斗五升六合  
寺社除地  
百九拾四石八斗七升八合  
前同断永引

下野国那須郡十八ヶ村之内

一、高千七百九石壹斗四升

内 ○六石七斗五升壹合  
寺社除地  
○千七百貳石三斗八升九合  
前同断永引

高合貳万貳千四百四拾九石三斗五升九合

内 ○八百石  
東照宮御社領并御祭礼免  
○千五百壹石四斗六升九合  
寺社除方  
（菩提所稻木村久昌寺并同能化へ寄付

○壹万九千七百四拾七石八斗九升  
廢地并都而永引

右、此度役懸指除申候高辻小訊、如斯二有之候

右之外

御朱印地寺社領之分

常陸国茨城郡拾ヶ村之内

一、高八百五石

寺社貳十ヶ所

同国那珂郡十ヶ村之内

一、高五百五拾八石

同十七ヶ所

同国久慈郡拾六ヶ村之内

一、高五百三拾石六斗余

同国多賀郡八ヶ村之内

一、高貳百七拾石

同国新治郡貳ヶ村之内

一、高四拾石

同国行方郡貳ヶ村之内

一、高貳拾石

下野国那須郡貳ヶ村之内

一、高三拾七石

文化六年巳五月

同廿三ヶ所

同九ヶ所

寺貳ヶ所

同貳ヶ所

寺社三ヶ所

高合貳千貳百六拾石六斗余 村数五十壹ヶ村右之通りニ御座候、以上

水戸殿

大吟味役

田丸安(北)□□

桜井小之(通)□□

御勘定所

(五五二)

扱下高原村兵三郎留置候小児、六戸領(小原村)□□百姓直吉と申者子供之由ニ付、人元糺□□私共より

先方御郡奉行中へ及掛ヶ合候(宛、相違)□□無之付、右之もの并由緒等為迎罷越候(由ニ付)□□、去ル朔日役所へ罷

出候間、右村支配御山横(目へカ)□□取扱申付候処、仕着等ヲも為着不見苦敷様仕、翌日相渡候趣申出候間、

此段御心得ニ申上候、以上

八月

加藤孫三郎



(五五二)

御書付致拜見候、秋冷相催候処、御堅固ニ被成御勤役之由、珍重之御事ニ御座候、然ハ支配所高原村兵三郎へ預ケ置候小児之儀、先達而及御かけ合候処、弥御領処小泉村百姓直吉子供ニ相違無之趣ニ而為迎、右之もの并由緒等指越被成候付而ハ、右村へ之達ふり等いさる御紙面之趣致承知候、則去ル二日相渡遣申候間いさるハ是より御承知候儀与、右御報迄如此御座候、以上

八月十三日

加藤孫三郎

島崎八郎左衛門様

(五五三)

御書付致拜見候、(所カ) 円暁院様御墓□御用伽羅石等、前例之通此度(江戸表カ) □□相済候間、村方へ達方之儀御かけ合御(庭カ) □候処、未御達無之候へ共、相廻候ハ、早速申付候様可致、仍此段及御報候、以上

八月十三日

加藤孫三郎

島崎八郎左衛門様

(五五四)

以書付致啓達候、宍戸御郡奉行へ之文通小飛脚之ものニ無之候得共、千波屋敷迄遣候へハ、先方へ早速ニ相届候趣ニ御座候間、御世話ながら浜田へ御申合、右屋敷まで御遣被下候様致度御無心申候、以上

八月十三日

加藤孫三郎

松平権蔵様

山口直次郎様

(五五五)

以書付致啓達候、沢村一乘院倅<sup>〔五言カ〕</sup>□□牢扶持代之内式分飯田村善藏院へ<sup>〔御取カ〕</sup>□□被仰付候付、別紙之通願出候由二而願書御<sup>〔委出カ〕</sup>□□御かけ合之趣いさる致承知候、仍而取扱<sup>〔候付カ〕</sup>□□為相糺候処、去暮中筋へ御申出書役所迄相廻候処、右之御文面二而ハ前書之通右院へ御達被成候ふり二付、殘金へ未進組入割賦相極、尤善藏院儀ハ一乘院跡職ヲも引受外俗縁之者とハ次第も相違ひ候由ヲ申、先達而掛御目候割賦帳相究候節も、一同不承知之処、取扱候御山横目別紙之通申含メ、漸承知為致候趣、別紙之通申出候、殊二額田村祐介儀ハ甚困窮二而、亦候指出候儀ハ相成かね候者之由、右院願之趣ハ無摠相聞候へ共、件之通候間、宜御了簡之上御達被下候様致度別紙返遣、此段及御報候

八月十三日

松本七郎衛門様

加藤孫三郎

(五五六―一)

以廻状得御意候、扱下大中村百<sup>〔姓カ〕</sup>□□与市衛門隱居へ、去廿五日夜盜賊忍入、別紙之品々被盜取候段訴出候付、例之通扱下御山横目ともへも相達、尚また皆様へも御申合いたし、郷村触指出候旨、其筋へも申出候事二御座候間、乍御世話よろしく御取扱被下候様致度、則別紙指添得御意候条、早々御順覽被成候、以上

八月

九郡宛

岡野庄五郎

(五五六―二)

大中村  
一、木綿花いろむじわた入<sup>〔色無地綿〕</sup> 壺ツ

一、ちくさ形付ゆかた 壺ツ

一、ちくさむじわた入 壺ツ

一、花いろ橘之紋羽織 壺ッ

一、あへ縞女ゆかた 壺ッ

一、青梅横(縞)小しま給 壺ッ

一、黒むじ太織わた入 壺ッ

一、ちくさ太織女帯 壺本

ノ九品

右、当村百姓与一衛門隠居へ、去廿五日夜盜賊忍人、前書之品々被盜取候付、別紙を以御訴奉申上候、以上

文化六年巳七月

右村

庄屋甚五兵衛

与頭五人

物印

(五五七一)

俊祥院様御忌日殺生御停止(之カ)□義ニ付、別紙之通御奉行衆より御達御座候付相廻申候間、其旨御心(得カ)□可被成候、御順覽可被成候、以上

七月十二日

小原忠次郎

九郡宛

外見習衆式人

(五五七二)

俊祥院様御忌日殺生御停止之義、別紙之通御心得、御同役中・見習中へも御達可被有之候、以上

七月十二日

赤林八郎左衛門

興津所左衛門

小原忠次郎様

野中三五郎

十月十七日

右者、俊祥院様御忌日ニ付、御祥忌月ハ宵日より二日、御平月ハ毎月御当日、殺生御停止之事

(五五八)

以廻状得御意候、役所明跡へ伺<sup>(之上カ)</sup>□□召抱・繰上等申付候間、此段為御<sup>(知カ)</sup>□□得御意候条、御世話なから御順達可被下候、以上

七月十日

藤田次郎左衛門

小宮山次郎衛門様 石川儀兵衛様

岡野庄五郎様 小原忠次郎様

増子幸八郎様 入江忠八郎様

白石又衛門様 皆川弥六様

加藤孫三郎様 松平権蔵様

山口直次郎様

是ハ、五月十六日死去致候

小林三九郎

大久保清次衛門

是ハ、右明跡へ添役手代より米五石□□本渡手代ニ繰上申候

小林周八郎

是ハ、右跡へ金五兩取添役手代□□□□当月廿日召<sup>(抱申候カ)</sup>□□□□

右之通、申付候事

(五五九)

一、円晁院様御墓所御普請ニ付、御石碑□□御所望、其外敷石等も為御取被成度旨□□<sup>\*</sup>葬若様御願之通相濟候付、前振之通取<sup>族カ</sup>候様其扱々へ達候儀、当二月中本職□□之族へ相達置候処、右之内敷石・伽羅石・厄木石等ハ石神扱ニ而取計相渡候趣有之所、右之分今以不相渡、御普請御指支相成候付、早々相渡り候様ニ致度旨、向方役人中より申来候趣ニ而、爰元御用人中申出候条、右旁加藤孫三郎へ早々御達可被有之候、以上

八月廿日

(五六〇一)

別紙之通江府御中間頭恵□より代人之儀申出候間、よろしく御執計可被成候、以上

八月十六日

藤田次郎左衛門様

岡部忠蔵

(五六〇二)

村松東方村

黒鍬

林蔵

右之もの、当月八日御門外へ風与罷出罷帰不申候付、相尋候得とも相見不申其段申出候処、尚また御達付為相尋候得とも行衛相知不申、欠落仕候義と奉存候、依之代人早々為指登候様、御国其筋へ御達相廻候様仕度奉存候、此段申上候、以上

八月十四日

渡辺長兵衛

(五五九)

<sup>\*</sup>葬若様 つねわか様。水戸藩主徳川治紀の四男頼筠(よしかた)。文化四年十二月二十九日、六百藩一万石藩主松平頼敬の養子となり、七代藩主となる。天保十年五月十七日、三九歳で死去。

滝田与八

(五六二)

湊村帳外伊十と申者、当月二日□□御扱下高野村紋兵衛所ニ而盜致候へハ、右村番多より栗崎村小屋迄、吉十為知有之二付、湊村へ出役之支配へ申付候上召捕候趣申出候間相糺候処、紋兵衛方へハ金壹分遣入割相済候趣、仍而先ッ伊十義御町牢へ入獄申付置候得とも、弥金壹分鑿壹貫四百文盜取候ばかりニ□□可有之哉、尚又盜候義内済致候義者不心得候様ニ御座候間、夫彼拘り之もの御糺之上、伊十申口へ符合不致義ニ有之候ハ、尚また伊十かた可為相糺候間、被仰聞候様致度存候、仍而口書壹卷相廻及御掛合候、以上

八月十九日

藤田次郎左衛門

加藤孫三郎様

(五六二一)

以廻状得御意候、然者 文公様御□□<sup>(髷)</sup>所御用斑石并見影石運送賃別□□<sup>(高)</sup>可相懸分、元南武茂御郡下村々より取立候処、右別高知行所へ可相掛分御承知之通申出之上、上より被下ニ相成候ニ付、金鑿請取、右扱々へ割返申度、別紙手形仕出可申御断、一同相廻掛御目申候間、思召も無御座候ハ、御名印御極メ、早々御順覽留り御方様より御返可被成候、以上

八月七日

岡野庄五郎

増子幸八郎様 入江忠次郎様

白石又衛門様 加藤孫三郎様

藤田次郎左衛門様

尚々、元太田・松岡御拘りニ付、御連名ニ而仕出申候事ニ御座候

(五六二)

\*高野村 こうや村(那珂郡)。石神組に属する。現ひたちなか市高野。

\*番多 ばんた。番非人のこと。町や村の番人を勤めた非人。(二六三)穢多・非人を参照。

(五六二一)

\*斑石 まだらいし。久慈郡町屋村・良子村より産する橄欖岩(かんらんがん)の石材。竹葉石。

\*見影石 みかげいし。久慈郡町屋村、良子村、小菅村より産する花崗岩質岩石の石材。黒御影・白御影・赤御影の種類がある。

\*武茂郡 むも郡。郡制改革以前の郡。正徳元年には那珂郡北西部・茨城郡東部・下野国馬頭地方の一〇九ヶ村であった。寛政十二年に一部を野々上組として分け、さらに享和二年に常葉組・鷲子組に分けられた。

(五六二—二)

覚

文金拾七両鑿三百四拾七文

右、文公様御墓所御用斑石并見影<sup>(石)</sup>□、町屋村より瑞龍御山迄運送入札を以請負申付、元太田・松岡御郡下村々より取立候処、中山備中守殿知行所へ可相掛分、御了簡之上 上より被下置候二付、右受取手形仕出申候間、御加裏判相濟候様仕度奉存候、尤此段吟味方へも御断可被下候、仍而、此段申上候、以上

八月

岡野庄五郎

増子幸八郎

入江忠八郎

白石又衛門

加藤孫三郎

藤田次郎左衛門

(五六三)

請取申金鑿之事

文金拾七両鑿三百四拾七文小粒

右、文公様御墓所御用斑石并見影石、町屋村より瑞龍御山迄運送入札を以<sup>(請)</sup>負<sup>(カ)</sup>申付、元太田・松岡御郡下村々より取立候処、中山備中守殿知行所へ可相掛候分、御了簡之上前書之通、上より被下置候間、請取相渡申候、仍如件

文化六年巳八月

藤田次郎左衛門

加藤孫三郎

白石又衛門

入江忠八郎 惣印  
増子幸八郎  
岡野庄五郎

蔭山三郎介殿  
横山甚七郎殿

(五六四)

八月廿日仕出御用

- 一、稲田村飢人栄蔵病死二付、別留之通吟味□□<sup>(方へカ)</sup>為知指出候事
- 一、内藤播磨守殿被通候二付、給物等別留之通御□□<sup>(奉行カ)</sup>衆へ為知指出候事

同日帰り御用

- 一、村松東方村黒嶽林蔵代人為指登可申、□<sup>(御カ)</sup>用人衆より前留之通御達之事
- 一、釈迦堂村地頭栗田七郎衛門知行書出、付札之通 直し指出候様ニと扱之事
- 一、<sup>\*</sup>円曉院様御墓所石取之義二付、別留之通御奉行衆より御達之事
- 一、高野村紋兵衛被盗品之義二付、前留之通申来候事

(五六五)

覚

式人御扶持

役所見習

佐川与三郎

右、諸御用繁多ニ而役所手代廻り合兼候砌、内役手代之内病氣ニ而相引居候者も有之、旁以指支申候二付、伺之上当月中御雇相済候所、去十六日 御発駕二付北浜筋へ被為 成候付而□<sup>(カ)</sup>御旅館場・御昼・

(五六四)

\*円曉院 松平頼敬(よりゆき)。  
六戸藩六代藩主。文化四年十一月八日、二二歳で死去。



御本陣其外舟渡・人馬□□□諸御用ニ手代共数日指出置候上、病氣□□□支配も未出勤不仕候ニ付、御用相後候儀も有□□<sup>(之カ)</sup>、殊ニ来月始ニハ大検見・小検見共ニ郷出ニ付、□□如何様ニも支配相廻リ兼甚指支申候、何□□□□之もの御取付御勘定相済候迄、御雇続ニ御□□<sup>(濟被カ)</sup>下候様仕度、此段奉伺候、以上

八月

加藤孫三郎

(五六六一一)

乍恐以書付奉御訴候事

一、乞食男死人壹人

常陸銚田村在

石八ツ戸百姓

作衛門

年六拾位

右、所持之品々

一、往来書付一枚 一、椀式ツ 一、茶わん式ツ 一、古紙入壺ツ

一、袋 壺ツ 一、きせる壺丁 一、たはこ入壺ツ 一、古皮籠壺ツ

一、播麦五合程 一、古綴給壺ツ

右之者、当月初居村常光寺江罷越一宿ヲ乞請、病氣之由ニ付四五日逗留仕候砌、居医師道作施薬指出療養為致、快方ニ付出立いたし、又候去ル十日より居村定使勘□□<sup>(之平カ)</sup>与申もの宅江一宿ヲ乞、逗留仕居候由之所、昨夜より療治為相加候所指重リ、今廿三日朝四ツ時病死仕候、右□□<sup>(之通カ)</sup>奉御訴候、何卒何れニも御下知偏ニ奉願上候、仍如□□<sup>(作カ)</sup>

文化六年巳八月

大久保村

庄屋

介兵衛

□□<sup>(字頭カ)</sup>

(五六五)

\*大検見 おおけみ。收穫量に合わせる年貢徴収量を定める検見法のために、代官や郡奉行が自ら坪刈を行い、結果から最終的な貢租量を決定すること。

(五六六一一)

\*銚田村 ほこた村(鹿島郡)。現銚田市銚田。中央を七瀬川が流れる。基本的には旗本領だが、一部が松前領となるなど、支配の境界が錯綜している。

\*常光寺 じょうこうじ。現在の結城市白銀町にある時宗の寺院。

御郡御奉行所様

利 (左衛門カ)  
□ □ □ □ □ □  
(源衛門カ)  
□ □ □ □ □ □  
(平衛門カ)  
□ □ □ □ □ □

(五六六一二)

往来一札之事

一、此作衛門与申者、当所石八戸百姓ニ而当院檀那<sup>\*</sup>二御座<sup>(候カ)</sup>□、然所此度心願ニ而諸国壹仏一社参詣ニ  
罷出申候

一、御関所無御相違御通可被下候、将又及日暮候而止宿等致難義候節者、其所々之御役人衆中宜御肝  
煎被遣可被下候様ニ願入申候、若又万一病死被致候ハ、其所之御作法通り乍御世話御取置可被下  
候、態々御知も及不申候、為後日仍而往来一札如件

享和三亥四月

常陸銚田村

天台宗

三光院

国々御関所

御役人衆中

国々村々

御役人中

(五六六一三)

死骸改書

銚田村

(五六六一二)  
\* 檀那 だんな。寺や僧に寄進する  
後援者。江戸時代には、キリスト教  
取り締まりの観点などから、庶民は  
基本的にいづれかの寺の檀那となる  
ことを義務づけられた。

\* 関所 幕府が主要街道や裏街道に  
設置した番所で、街道を通る犯罪者  
や不審者を取り締まった。また、藩  
が置いた類似の施設を口留番所とい  
う。

石八ッ戸

作(衛門カ)

年六(拾位カ)

一、男死人

但、惣身無疵

着類

一、千草古拾拾沓カツ

所持之品

一、袋沓カツ

一、皮籠カ沓カツ\*

内ニ往来証文沓カ枚、古紙入沓カツ、薬少々、(煙管)きせる、たはこ入、

麦米五合程、古腕椀カ式カツ、茶わんカ式カツ

右、当村百姓勘之平方ニ而相果候死骸御改ニ付、我々共御案内仕候所、前書之通相違無御座候、以上

文化六年巳八月廿四日

大久保村

庄屋

介兵衛

与頭

利左衛門

源衛門

平衛門

石神御郡方

改人 大内伝吾

(五六六一四)

(五六六一三)

\*皮籠 かわご。皮で張ったかご。竹や紙で張ったものもこう呼ばれることがある。旅行用の荷物入れに使われた。

扱下大久保村百姓勘之平と申者方江、去ル十日夕乞食<sup>(男)</sup>□止宿いたし、病氣ニ而歩行不相成逗留為仕候由之所、致病死候旨訴出候ニ付、支配指出為相糺候所、右之ものハ当<sup>(月)</sup>□初二も同村常光寺江罷越、病氣ニ而四五日致逗留候□□快氣ニ而右村ヲ罷立、又候十日夕右勘之平方江罷越一宿ヲ付候付、医師相掛藥用為仕候由ニ而、何等之疑心も相聞<sup>(不申)</sup>□□、尤生所ハ銚田村石八ツ戸作衛門と申者ニ而、往来証文<sup>(段取)</sup>□□前留写之通所持仕候ニ付仮埋申付候、仍而村訴并死骸改書共三通指添此段申上候、以上所持仕候付仮土中申付別紙村訴并死骸改書往来証文写指添此段申上候、以上

八月

加藤孫三郎

(五六七一一)

以書付致啓達候、俊祥院様御墓所御普請御用磯崎石運送之儀、別紙之通御用人衆より御達御座候間、例之通入札可申触と存候、仍而御扱村々ニも入札御申触御取揃ニ而、来月三日役所へ御廻御座候様致度存候、此段可得御意旨如斯ニ御座候、以上

八月廿二日

藤田次郎左衛門

加藤孫三郎様

尚々、別紙ハ御返し可被下候

(五六七一二)

俊祥院様御墓所御用磯崎石之儀、別紙<sup>(之通カ)</sup>□□御普請方より申出候条、宜御執計可被成候、以上

八月十一日

岡部忠藏

藤田次郎左衛門様

(五六七一一三)

覚

磯崎石三百五拾三 但、根入貳尺迄

百拾六本 面壹尺五寸

内 百拾六本 面壹尺四寸

百貳拾壹本 面壹尺三寸

右、俊祥院様御墓所御普請御用、平磯村内磯崎二而致山取置候分、瑞龍山御場所迄早々致運送候様、  
浜田御郡方へ御断被成可被下候、以上

八月

御普請方

(五六八一—)

別紙之通、禄高書出之儀、評定所より申来候間、則相廻申候条、宜御取扱可被成候、御覽御順達

(可被下候、以上方)

七月廿五日

小原忠次郎

九郡宛

(五六八一—)

当暮御切米御証文仕立候御用有之候条、禄高并指引中支配之分未々迄、御切名改(来カ)・死亡等  
当年中出入有之分、例之通委細ニ御書付、来ル廿九日迄 御城御証文方へ御指出可被有之候、尚亦御  
同役中支配之分共ニ書出候様是亦可被相達候、尤此後出入有之候ハ、其時々ニ御申出可被有之候、  
以上

七月廿三日

評定所

小原忠次郎様 藤田次郎左衛門様

同月

一、石川儀兵衛支配袴塚山三郎、三衛門と改名候ニ付、廻状にて申来候事

(五六九―二)

扱下上天賀村百姓安衛門と申者所へ、去ル五日夜盜賊忍入、別紙之品々被盜取候処、手懸り無之(旨カ)申  
出候間、致御申合大御山守・御山横目へ相達質屋等寄々心ヲ付候様可致旨、御奉行衆へも申(出候間カ)御  
達可被下候、御覽御順達可被成候、以上

八月十日

白石又衛門

九郡宛

(五六九―二)

上大賀村

百姓

安(前門カ)

- 一、青梅縞袴袴ツ 裏千草 一、棧留綿入 袴ツ 裏同断
- 一、紺縞綿入袴ツ 裏千草 一、棧留羽折 袴ツ 裏絹
- 一、広棧留羽折袴ツ 裏八丈 一、紬綿入 袴ツ うら千草絹
- 一、花色こはく男帯 袴筋 一、銀きせる 袴挺
- 一、腰物 袴腰 一、綿入どふ着 袴ツ
- 一、紙合羽 袴枚 一、風呂敷 袴ツ
- 一、木綿小くら男帯 袴筋 一、鏢五貫文

メ拾五品

右之通、一昨五日夜八ツ時分盜賊忍入、被盜取候品々無相違奉書上候、以上

文化六年巳八月

右村庄屋

(五六九―二)

\*上大賀村 かみおおが村(那珂郡)。八田組に属する。現常陸大宮市上大賀。保内領(現大子町)より水戸へ通じる往還道筋にある。

藤次兵衛

与頭

五人

(五七〇一一)

以廻状致啓達候、然ハ瑞龍山 文公様御〔義御之〕普請御用人足・内夫日雇錢別高へ可相〔縣分カ〕、元南武茂御郡下村々より取立候処、右別高〔可相懸分カ〕上より被下候振、先達而伺相濟候二付、別紙之通〔前カ〕取手形仕出申度、御断書付一同相廻申「」無御座候ハ、御印形御極候上、早々御順達留り御役所より御返し可被成候、以上

八月十日

大里組

小菅組 大子組 八田組\* 石神組

浜田組

(五七〇一二)

覚

文金拾三両三分鏝六百四拾毫文

右、瑞龍山 文公様御募御普請御用人足・内夫入札ヲ以請負申付、日雇錢之義ハ元太田・ま〔松〕ツ岡御郡下村々より取立候処、中山備中守殿知行所村々へ可相懸分、前書之通 上より被下置候二付、右請取手形仕出申候間、御加裏判相濟候様吟味方へ御断可被下候、以上

八月

岡野庄五郎

増子幸八郎

入江忠八郎

白石又衛門

(五七〇一二)

\*八田組 はった組。水戸藩の郡制改革で、寛政十二年二月に武茂郡から武茂とともに野々上組が分立し、同年七月に八田村に陣屋が置かれて八田組に改められ、管内は那珂郡三九ヶ村、久慈郡九ヶ村の計四八ヶ村であった。文化六年の郡奉行は白石又衛門。

加藤孫三郎  
藤田次郎左衛門

(五七一)

以書付致啓上候、然ハ御扱下茂宮村幸三郎芝田□□獄屋へ入獄被仰付置候処、脚氣之気味ニ御座候、  
□□<sup>(別而カ)</sup>兩三日ハむねはれのども首と申し位ニはれ、□□□□つきをふせられざる程ニせハしく御座候  
付、九死ニ一生ニ御座候由療医より申出候間、則容体書為指出御廻申候間、宜御取計被成候様奉存候、  
勿論随分療治相加へ候様ニ呉々申付候事ニ御座候へ共、右之趣申出候而及御掛合申候、此段得貴意度  
如斯御座候、以上

八月廿五日

永井長十郎

蓮田藤介様

照沼伴五郎様

右御書之通、懸合有之ニ付、前振見合ヲ以、快気迄出牢村預ケ申付候由、可及返書之事

(五七二)

水木村御陣屋損候ニ付、御修覆之儀、別紙之通申出有之候条、宜取扱候様加藤孫三郎へ御達可被成候、  
且少分之御手入之儀有之候へハ、此度積書指遣ニ不及、追而修覆出来候上、入用書指出候様、旁御達  
可被成候、以上

八月廿七日

岡部忠藏

藤田次郎左衛門様



(五七二)

水木村御陣屋、去ル廿三日夜大風ニ而□□□□囀吹返シ、異国番所先達而御修覆□□□□、亦候家上吹破、私詰処家上西北之方別而大破并組之者詰所々吹破リ、雨天ニ御座候へ者甚難渋仕候、依早速御修覆相濟候様御郡□□御断相廻リ候様仕度奉存候、以上

八月

三木孫大夫

(五七三)

以書付致啓達候、御別高村々より扱下油繩子等村々江指出候去ル辰年分売穀手形江別紙ヲ添相廻申候間、宜御取扱可被成候、尤手形之内式拾式枚紛失いたし候ニ付、為相糺候而も相分兼候所、買入帳之面ハ相違無之候間、相尋跡より指出候様申達候事ニ御座候、右之段得御意度如此御座候、以上

八月廿八日

加藤孫□□(三郎)

島村孫衛門様

(五七四)

覚

竹瓦村\*

百姓

勇介死骸、九月廿八日居村混杭ニ懸居候ヲ見付候旨申出候間、  
死骸取仕舞申付候、尤村方申出ハ一ト通りニ付略ス

勇介

藤□□(三郎)

右之もの共、去ル廿四日久慈川水増之節、流木揚ケニ罷出、水死仕死骸相見不申候趣村方より訴出候間、川根村々へ申付為相尋候処、藤三郎死骸ハ久慈村川口ニ而見付候処、全溺死ニ相違無之相聞候間、由緒之もの共へ為相渡申候、尤此上疑心之筋も相聞候ハ、其節相糺可申上候得共、先ツ此段御心得ニ申上候、以上

(五七三)

\*売穀手形 ばいこくてがた。別高の松岡領の村々が他の組の村々に穀物を売るときに渡す手形。(八八) 切手と同じもの。

(五七四)

\*竹瓦村 たげがわら村(久慈郡)。石神組に属する。現東海村竹瓦。久慈川の兩岸にまたがる。

八月

加藤孫三郎

村訴ハ一ト通りニ付、爰ニ略ス

(五七五)

当月廿三日大雨夜ニ入候而ハ大嵐ニ罷成、北風□□之節ハ別而烈敷、翌廿四日ニ相成候へハ、久慈川  
 □□<sup>(水増カ)</sup>其外坂上郷筋小川々迄出水仕候へ共、いつれ□□<sup>(モカ)</sup>中水故田畠共ニ土地方へ相障候様程ニ者無御座  
 候、川根之分水入ニ相成候場所も有之候処、早速□□候付田方へハ相障申間敷由、扱又早稲・中稲迄  
 □□<sup>(ハカ)</sup>実法候後之嵐ニ候間、相障申間敷候へ共、晚稲へ者障候村方も有之、畠作之内粟・稗・荳・蕎麦・  
 煙草・綿へ者惣郷共ニ三四分位より五六分位迄も当り候様相見、其外少々宛者潰家半潰出来、並松并  
 御立山・百姓分付山等之内ニ者、風折・中折・根返り等場所ニより数多出来候分も有之旨、追々村々  
 より訴申出候付、此段御心得ニ申上候、以上

九月

加藤孫三郎

(五七六)

八月廿五日仕出御用

- 一、\* 太子扱等へ被為成候節、荷物持人之義、浜田組仕出戻り廻状忝通
- 一、湊御殿御逗留中鳶鷹打遠慮之廻状、常葉へ返□□<sup>(候事カ)</sup>
- 一、文公様御幕御用石割返し請取手形筋申出小□□而仕□□廻状返候事
- 一、栗田七郎衛門旧知高辻等書付付札之通り直し候「」指出候事
- 一、木払手形御勘定所書替ニ仕出添相廻候事
- 一、白庭村穀留番所御入目御勘定へ之御断、御奉行衆へ指出候事

(五七五)

\* 荳 え。荳胡麻(えごま)のこと。  
 シソ科の植物で、主に油をとるため  
 に栽培された。また胡麻の代用にも  
 なり、搾り粕が肥料や牛馬の肥料に  
 用いられた。

\* 風折 かざおれ。木などの頂がお  
 れている状態のこと。

(五七六)

\* 湊御殿 水戸藩の二代藩主光圀  
 が、元禄十年、湊村の日和山に建て  
 た贅賓(いひん)館の通称。お浜御  
 殿とも呼ばれ、酒宴や詩歌の会など  
 が催された。なお、湊村は現ひたち  
 なか市那珂湊。

(五七七)

九月朔日仕出御用

- 一、 禄高書出し之廻状壹通、常葉へ返候事
- 一、 袴塚山三郎改名之廻状 一、御普請方杭木納催促之廻状
- 一、 上大賀村安衛門被盜品之廻状 一、俊祥院様御募御普請磯崎石運送之儀廻状ノ四通、浜田へ廻事
- 一、 松杭木納浜田組仕出廻状、大里へ廻候事
- 一、 竹瓦村之者水死二付、前留之通御奉行衆へ指出候事
- 一、 文公様御募御普請割返シ請取方之義二付、大里組仕出廻状小菅へ廻候事
- 一、 向山村飢人甚六御救稗引上ケ、為知吟味方指
- 一、 大嵐二付景氣書、前留之通御奉行衆へ指出(候事カ)
- 一、 大久保村病死人二付、前留之通為御知御奉行衆へ(指出候事カ)
- 一、 指向廻状浜田へ返候事
- 一、 宝照院様納槓之義、浜田組仕出廻状返候事
- 一、 山姥と申魚、河原子より指出候付、別留二有之通、権蔵殿相願御通事中迄指出候事
- 一、 瑞龍御参拜之節、請取置候御幕三对者、此度北浜御成之節、先々へ相廻常葉迄送候付、御幕吊共  
四本ハ六日馬付ニ而遣候、御幕一同御矢倉方へ納候様、常葉へ申遣候事

(五七八)

覚

町売足り四寸二当ル

- 一、 壹連釘 壹把 数貳拾本

代拾九文

〃 足り三寸

一、式連釘 壹把 数四拾本

代拾九文

〃 並五寸

一、四寸釘 百本二付、壹匁四分八厘

〃 六寸

一、五寸釘 百本二付、三匁九分

〃 七寸

一、六寸釘 百本二付、六匁

一、七寸釘 百本二付、拾壹匁

右、御普請方御買上直段等、前書之通ニ有之□□、右、役所より申来候事

(五七九)

以書付致啓上候、御廟御繼足新規御普請御家上瓦葺迄も出来致候所、最早漆喰付候一段ニ罷成、石灰御品切にて御指支ニ相成候、何れへも即刻役所迄付送候様御取扱可被下候、以上

九月朔日

御普請方

手代共

石神御郡方

御手代様中

(五八〇)

以書付致啓達候、大久保村亀五郎御役金方拝借上納延引ニ付、当人役所へ罷出候様先日も得御意候所、今以不罷出候間、早速罷出候様御取扱可被下候

一、諏訪村介川徳衛門等三人三ツ割ニ而上納□□□其後無沙汰ニ而御座候間、早速罷出、上納□□□

候様、是又御達可被下候、奉願候、以上

八月廿九日

加藤孫三郎様

酒井〔(市之允)〕

(五八一)

佐川与三郎御雇続之儀ハ、伺之通相濟候旨御達御座候、仍而此段得御意候、以上

八月廿九日

孫三郎様

(松平)権藏  
(山口)直次郎

(五八二)

一、式人御扶持

役所御雇

佐川与三郎

右之者、役所手不足ニ付、御雇続伺之通相濟候付、則御雇申付候、此段為御知申上候、以上

九月

加藤孫三郎

(五八三)

九月五日仕出御用

一、与三郎御雇之義、前留之通為御知御奉行衆へ指出候事

一、石灰納之義ニ付、別留之通手送り上納ニ致□□□御奉行衆へ申出候事

一、読書指南之義ニ付廻状壹通、常葉組へ返候事

一、竹木手形等手形拾五枚、御勘定所へ書替ニ指出候事

(五八四)

一、金貳百疋

菊池五介

去秋中、麻買入為御用鹿沼表へ罷越、遠路大儀いたし候ニ付、御掛りへ窺之上、前書之通御心付被下置候事

(五八五)

以書付致啓違候、然者友部村博奕一件拘り扱下上郷村惣三郎入獄申付置候処、最早数日ニ相成申候間、穿鑿御懸御座候様致度、此段得御意候、以上

九月四日

増子幸八郎

加藤孫三郎様

(五八六)

覚

總耆貫八百七拾四文

右、文公様御墓所御用伽羅石并真沢石運(送)□入札を以請負申付、惣郡割ニ而村々より取立候分、

「(元松)」岡・太田弍郡割之分ハ、別高丈ケハ 上より被下候処、□□御領中割之分ハ別高へも懸候様

ニと当四月中御達ニ罷成候付割合為相極候所、件之員数別高へ相懸リ申候、少分ニ者御座候へ共、已来之形ニも罷成候間、私より一左右次第、前書之通取立相廻候様、島村孫衛門方へ御達可被下候、仍而此段申上候、以上

九月

加藤孫三郎

(五八七)

御制服村触之儀、山横目等之妻子着服未相決分ハ、極リ候節追触致候とも、先ツ一応ハ触出候様被成度旨、先廻状へ付札ニ而被仰聞候御役所も有之、其外今以廻状不相返分も有之、尤二月□□<sup>(申中)</sup>触置候間、村々ニ而も弁居候事ニ可□□<sup>(程之)</sup>候得とも、此節元山町・雷神町も「□□」申候間、郷中之もの御町方ニ而見答候□□次第も、右祭礼前為触知置候方可然と、則再触文言為目論廻状わけ及御相談候条、御存寄御付札ニ而早そく御廻可被成候、以上

九月七日

小原忠次郎

岡野庄五郎様

入江忠八郎様

加藤孫三郎様

(五八八一)

在町ニも近来奢侈増過いたし、無益之費有之候ニ付、百姓町人妻子等迄着服麻布・木綿之外一切当九月中より御停止、襟帯之儀ハ絹紬御免ニ相成、山横目并庄屋役相勤候もの□□、絹紬致着用不苦旨被仰出候付、委細当二月中申触置、面々承知之事ニハ可有之候得とも、一体奢侈之風俗御改可被遊御仁恵を以被 仰出候事ニ付、此節より支配共於廻り先、少も無用捨為見答候条、小人忝人切ニ申含、御制禁之品不致着用様可申達候、若不心得之ものも有之候ハ、先達而申触候通、当人ハ勿論村役人共迄急度申付ふり有之候条、其旨可相心得候

一、木綿合羽或ハ雨浴衣着用いたし候もの、着服疑敷相見候得ハ、合羽又ハ浴衣為脱候而改候条、其

旨小人ともへも可申付置候

但、合羽装束羅紗或ハ天鵝絨之儀ハ不相成候間、此段耽下可申付置候

一、百姓共万一御制服致着用御城下へ罷出候得ハ、於御町方見答、町人共之義も郷中ニ而御制服致着用候得者、於御郡方見答候筈ニ候条、旁心得差無之様耽下可申付候

(五八七)

\*元山町 もとやま町。水戸藩城下近郊の町名。現在の水戸市元山町一・二丁目。常葉村の内であるが近世中期までに形成された新しい村。

(五八八一)

\*天鵝絨 びろーど。漆毛織りの一種。織物の表面を毛羽または輪奈(わな)でおおった織物の総称。

一、山横目・庄屋ハ頭立候役儀相勤候故を以、絹袖御免ニ候得とも、上ニも格別御儉約被遊候御時節を弁、綿服着用可然段、先達而申触候通可相心得候

右之趣、村中寺社門前ニ至ル迄、心得違無之様無洩申合、小人老人切ニ承知之印形庄屋元へ取置可申候、此廻文見届村下へ庄屋致印形、早々相廻留りより支配役所へ可返候、以上

九月

御連名

(五八八一二)

\*綿<sup>(絹)</sup>呉呂等如何心得候哉之旨、別紙之通り御奉行衆より御達御座候処、右品々迄御停止与相成候而ハ犯科之ものも多ク、殊ニハ永ク御模通之処大切之儀ニ候間、右品々ハ御免ニ而も可然哉、於拙者致愚慮候得とも、皆様御存寄如何可有之哉、廻状四通ニ而及御相談候条、否御付札ニ而早御順達留りより御返可被成候、御決着<sup>(之カ)</sup>□処を以御町方へ懸合之上、御奉行衆へ申出候様可致存候、以上

九月七日

小原忠次郎

岡野庄五郎様

入江忠八郎様

加藤孫三郎様

御町奉行中  
御郡奉行中

綿<sup>(絹)</sup>呉呂・綿袖・木綿太織・青梅縞・棧留・紙布ハ如何心得候哉、両役所申合、否可被申出候事

付札、御廻状之趣御尤奉存候、於拙者何等之存寄も無御座候間、宜御取扱被仰出候様致度存候、以上

(五八八一二)

\*綿<sup>(絹)</sup>呉呂 わたごころ。呉呂はゴロツクレン(呉呂服連)の略で、イギリヌ・オランダからの舶来のあらひ梳毛(そもう)織物の一種。毛足の長い粗剛な羊毛を用いて織ったもの。カッパ地・帯地などに用いられた。ここでは綿で作った模造織物のこと。



(五八九)

以書付致啓上候、然者御用かんすい石大森・真弓二村江御達被下候様仕度奉存候、御用人衆より之御断御達ハ大森へはかり之御断ニ御座候由之処、右村計ニ而宜敷無御座候節ハ御用手支ニ罷成候間、二村へ之御達ニ奉頼候、此段得御意度如斯御座候、以上

九月八日

太田九藏

加藤孫三郎様

尚々、町屋村へ当時御石取御用ニ罷越居申候間、否御返事町屋へ被仰遣可被下候、以上

(五九〇―一)

来春 御参府御土産御用寒水石、別紙之通御扱下大森ニ而太田九藏江為御取ニ相成候間、其旨御心得可被成候、勿論九藏義外ニ御用有之、町屋村ニ罷在候間、御承知ニ候ハ、右へ御達可被成候、分ケ而此方江御答不及候、以上

九月五日

中村与一左衛門

加藤孫三郎様

(五九〇―二)

覚

寒水石式本 長壹尺三寸  
五寸角

右之通、御郡方へ御断可被下候、以上

九月五日

太田九藏

(五九一)

(五八九)

\*かんすい 寒水石のこと。久慈郡真弓・瀬谷・亀作・大森村より産す大理石の石材。純白のものと白地に灰色の縞があるものがある。

\*真弓村 まゆみ村（久慈郡）。石神組に属する。現常陸太田市真弓町。真弓山山中から大理石が産出された。

扱下油繩子村稗藏御普請ニ付、御入用釘直段積書高直之由ニ而、御普請方納釘請取、御普請<sup>(之カ)</sup>上、追而代鑑右役所へ相払候様御達ニ付、先キ方へ懸合候処、役所ニ而積り候釘とハ致相違御用ニハ相立兼申候、仍而ハ是迄之通入札ニ申付度奉存候、若又役所より指出候通之御品新規打立、相廻候様御普請方へ御達被下候共、何れ両様之内御達被下候、尤当時御普請取初立居候間、早速御達可被下候、仍而釘両様指出入御覽、此段申出候、以上

九月

加藤孫三郎

(五九二)

原<sup>(半太志)</sup>

同人

清水<sup>(番衛門)</sup>

沢目\*

岡田

内田

石神御郡下当田方小検見相濟候村々、別紙之通ニ御座候、以上

九月十日

大吟味役様中

加藤孫三郎

(五九三)

九月十日仕出御用

- 一、田方小検見差割三枚、前留之通大吟味方へ指出候事
- 一、御国廻り伺之廻状、常葉へ返候事
- 一、真沢石運送代之義、別高へ之御断前留之通御奉行衆へ指出候事
- 一、油繩子村稗藏御普請ニ付、釘之義前留之通御用人衆へ申出候事

(五九四―一)

扱下飯田村百姓証衛門与申もの、去ル四日夕<sup>(方カ)</sup>□家内不殘農事ニ罷出候処、別紙之品々被盜取候旨訴申

(五九二)

\* 沢目(村) さわめ村(久慈郡)。石神組に属する。現常陸太田市沢目町。久慈川と里川の形成した沖積低地に位置する。

出候付、皆様へも御申合いたし、寄々質屋等為相糺候様御奉行衆へも申出候間、乍御世話御山横共(目)へ  
宜御達被下候様致度存候、御順覧可被下候、以上

九月七日

九郡宛

小原忠次郎

(五九四―二)

覚

- 一、花色むし綿入男物壱ツ 但、裏古物
- 一、茶ひろうと袷壱ツ 但、紋丸之内花びし裏浅黄
- 一、千種目引男单物壱ツ
- 一、千草切替袷男物壱ツ
- 一、花色紋付袷男物壱ツ 但、紋花ひし
- 一、紺立しま袷男物壱ツ
- 一、千草目引男单物壱ツ
- 一、花色綿入むし男物壱ツ 裏千くさ
- 一、茶ひろうと綿入羽織壱ツ 但、鹿の子目引浅黄
- 一、千草立縞目引男单物壱ツ
- 一、白木綿浴衣壱ツ
- 一、花色紋付綿入小供物壱ツ 紋花ひし
- 一、千草形付单物同壱ツ
- 一、千草单物同壱ツ
- 一、茶ひろふと紋付女綿入壱ツ 紋花ひし
- 一、同紋付袷壱ツ 紋花沢潟

一、千草綿入羽織女物壹ツ 裏あさぎ

ノ拾七品

右、当村証衛門与申者、去ル四日夕方仕事へ罷出候□主(留)ニ被盜取申候、此段御訴申上候、以上

巳九月

飯田村

庄屋 五郎衛門

与頭 四人 印

御郡御奉行所様

(五九五)

以 書付致啓達候、然者来ル十八日方大子筋へ 御成御座候ニ付而ハ、役所少人別ニ付 御旅館・御昼休等へ引配兼、尚また体ニより八溝山へも 御登山可被遊旨御達も御座候得ハ、尚以廻り合かね申候処、御支配之内老人相雇申度奉存候間、廿日夕迄ニ御繰合之上、御さし遣被下候様いたし度、此段御無心申候、且又前件之通ニ而、いつれにも廻り合兼候間、御繁多之内ニハ候得とも、いつれにも御指越被下候様いたし度奉存候、右旁御無心申度如此御座候、以上

九月十一日

増子幸八郎

加藤孫三郎様

尚々、否貴答早速可被仰下候、且御支配名前はまた被仰越可被下候

(五九六)

御書付致拝見候、来ル十八日方大子筋へ御成御座候付、御役所御手不足ニ而御指支被成候間、支配壹人來ル廿日夕着ニ御用立可申旨、いさゝ被仰聞候趣致承知候、役所之義も先達而 御成御用ニ取懸諸御用向手後ニ罷成候上、当時小検見最中ニ而、指支候儀ニハ御座候得とも、此度ハ無扨御用筋之儀ニ有之、支配広瀬十左衛門義、右御用之間ニ合候ほとニハ、小検見御用相仕廻候日繰ニ候間、御役所

へ廿日着二、右之もの御用立可申候、仍此段可得御意如此御座候、以上

九月十三日

加藤孫三郎

増子幸八郎様

(五九七―二)

\*唯心流火術、此度梅沢孫太郎方より、免許相請申候ニ付試申度候所、近年勝手困窮仕、尚又御借上も打続候得ハ、自力ニ相叶不申候間、前ニ相済来候通、拝借金相済候様奉願上候、以上

九月

岡部新次衛門

(五九七―二)

扱下大久保村郷土岡部新次衛門拝借之儀、別紙之通願出候間、相済候様於私ニ奉願候、以上

九月

加藤孫三郎

右願、不□□趣ニ而願書御下ケニ相成候間、九月廿日「」帰候事

(五九八―二)

乍恐以書付奉願上候事

文金三拾両也

極窮百姓拾式人

内金拾八両

是ハ、極窮人拾式人江割渡シ、無返納ニ而御救被下置候様仕度奉願上候

残金拾式両

是ハ御役所様江利付御返金ニ指出シ、壹ケ年利金壹両本八百文ツ、来午より申迄拾

五ケ年御渡シ被下候分ヲ、直ニ上納仕候得ハ、拾八両ニ罷成申候間、本文同暮拾式両

上納ニ指向、皆納ニ罷成候様拾五ケ年賦ニ奉願上候

(五九七―二)

\*唯心流火術 水戸藩下で採用されていた砲術流派の一つ。鉄砲を扱う技術を体系化していたと考えられる。